

平安後期物語論——熱狂と鬱屈

葛 綿 正 一

... et mon luth constellé

Porte le Soleil noir de la Mélancolie.

Gérard de Nerval

本稿では、『浜松中納言』『夜の寝覚』『狭衣物語』など平安後期の物語が一樣に鬱屈して生氣のない世界であることを論じてみたいと思う。すなわち、それは「胸ふたがり」、「屈んじ」、「結ばほ」る世界である。あらかじめ概要を示しておこう。まず第一章では『浜松中納言』『夜の寝覚』の作者とされる菅原孝標女、『狭衣物語』の作者とされる六条斎院宣旨がともに鬱屈した魂の持ち主であることを指摘する。続く第二章では『浜松中納言』『夜の寝覚』『狭衣物語』が鬱屈して生氣のない世界を描いていることを明らかにする。そして第三章では孝標女の『更級日記』を取り上げ、平安後期物語の精神を再確認することになる。

なお、主な原文の引用は池田利夫校注『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年）、鈴木一雄校注『夜の寝覚』（同、一九九六年）、小町谷照彦・後藤祥子校注『狭衣物語』一・二（同、一九九九年・二〇〇一年）、鈴木一雄校注『狭衣物語』上・下（日本古典集成、新潮社、一九八五・一九八六年）、秋山虔校注『更級日記』（同、一九八〇年）、桑原博史校注『無名草子』（同、一九七六年）により、ページ数を付す。

一 菅原孝標女と六条斎院宣旨

1 菅原孝標女

『栄花物語』巻三〇で藤原道長の死は釈迦入滅にたとえられ、「釈尊入滅後は世間皆闇になりけり。世の灯火消えさせ給ぬれば、長き世の闇をたどる人、いくそばくかはある」と記されていた。したがって息子の時代は「闇」の時代、偉大な父親不在の時代といえるが、これから検討していく菅原孝標女も六条斎院宣旨もそうした頼通の時代に属している。孝標女は祐子内親王に仕え、宣旨は祿子内親王に仕えていたからである。祐子内親王と祿子内親王は後朱雀天皇を父とし、姫子中宮を母とする姉妹であり、ともに頼通を後見役としている。

周知のように御物本『更級日記』の奥書には「ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也。母倫寧朝臣女。傳のとののは、うへのめひ也。よはのめざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ」とあって、『浜松中納言』『夜の寝覚』の作者は孝標女である可能性が高いと考えられる。ここではまず孝標女の日記を検討してみたいのだが、その特徴は何であろうか。結論を先取りしていえば、『更級日記』を特徴づけているのは熱狂と鬱屈である。たとえば『源氏物語』への熱中ぶりはよく知られている。

はしるはしる、わづかに見つ心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず几帳の内にうち臥して、引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶ： (三五頁)

ここからは高揚感が伝わってくる。物語を読む喜びに満たされ「後の位」よりも高く舞い上がっているかのようだ。しかし、それは裏切られていく。「物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにあらば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし」(三五頁)。『源氏物語』への熱中にもかかわらず、孝標女は夕顔や浮舟になることができない。あれほど物語に熱中したにもかかわらず、物語への同一化は失敗に終わるのである。熱狂とともに、それが裏切られてしまった鬱屈もまた『更級日記』の基調となっている。熱狂が高まれば高まるほど鬱

屈は深まるであろう。孝標女は夢のなかで何度も叱責される。

僧の、別当とおぼしきが寄り来て、「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見て… (六三頁)

清水寺に参籠したとき見た夢だが、僧に咎められているのである（『更級日記』における僧はいつも「別当」のごとき威厳を備えているかのようだ）。

「この鏡には文や添ひたりし」と問ひたまへば、かしこまりて、「文もさぶらはざりき。この鏡をなむ奉れとはべりし」と答へたてまつれば、「あやしかりけることかな。文添ふべきものを」とて、「この鏡を、こなたにうつれる影を、見よ。これ見れば、あはれに悲しきぞ」とて、さめざめと泣きたまふを、見れば、伏しまろび泣き嘆きたる影うつれり。「この影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ」とて、いま片つ方にうつれる影を見せたまへば、御簾ども青やかに、几帳押し出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木づたひ鳴きたるを見せて、「これを見るはうれしな」とのたまふとなむ見えし… (六四頁)

鏡を奉納するため初瀬に代参した僧の夢だが、願文が添えられていないので、「あやしかりけることかな」と咎められているのである（『更級日記』における夢はいつも問答の形をとっており、詰問されているかのようだ）。そして、夢中の鏡に映っているのが、打ちひしがれた姿と華やかな姿である。華やかな光景が物語世界のそれであるとすれば、打ちひしがれた光景とは華やかな物語を見失ってしまった世界であろう。結局のところ物語への同一化は果たされない。それゆえ愛着の対象を喪失せざるをえない。物語の死といってもよいが、物語への熱狂の裏側には対象喪失の鬱屈が貼り付いているのである（それは『更級日記』における母親の不在とも対応している）。孝標女作とされる物語の題名が「みづからくゆる」というのも偶然ではないだろう。¹⁾

2 六条斎院宣旨

さて藤原定家『僻案抄』や御伽草子『調度歌合』の記事から、『狭衣物語』の作者は六条斎院祿子内親王に仕えていた宣旨（源頼国女）と考えられるが、その周辺にも鬱屈した空気が漂っていたと思われる。実際、内親王は父母と

早くに死別し、しかも病氣がちであった。生まれたのは長暦三年（一〇三九）八月十九日だが、生後十日で母と死別している。父の後朱雀天皇が亡くなったのは内親王七歳のときである。八歳で齋院に卜定されるが、十四歳の夏は背中の腫瘍で発熱し、十九歳のときの賀茂祭は病により欠席した。二十歳で齋院を退下し、五八歳で亡くなっている。²晩年は「狂病」に責められていたというが（『中右記』永長元年九月裏書）、『栄花物語』「けぶりの後」では次のように語られている。

先代をば後朱雀院とぞ申める。その院の高倉殿の女四宮をこそは齋院とは申すめれ。稚くおはしませど、歌をめでたく詠ませ給。候ふ人々も、題を出し歌合をし、朝夕に心をやりて過させ給。物語合とて、今新しく作りて、左右方わきて、廿人合などせさせ給て、いとをかしかりけり。明暮御心地を悩ませ給て、果は御心もたがはせ給て、いと恐ろしき事をおぼし嘆かせ給。一条院の焼けにし事だにあるに、内裏・大極殿一夜に焼けぬ。いといとあさまし。これは天喜六年といふ。（中略）かくあさましき事のみ多かれは、御心のうちに殿もあさましくおぼしめして、齋院おろし奉らせ給て、麗景殿の姫宮居させ給ぬ。おりさせ給ても、御心地治らせ給事なし。

（引用は古典大系による）

ここからは華やかさとその裏面が浮かび上がってくる。³「明暮御心地を悩ませ給て」とあって、とても澁刺とした環境であつたとは思われない。頼通の後見があつたはずだが、鬱屈した環境であつたからこそ、たびたび歌合を催し和歌や物語に熱中したのであろう（『平安朝歌合大成』によれば齋院時代に一五回、その後一〇回）。

齋院という環境にも注目してみたい。それも鬱屈の原因にちがいない。世俗との交わりを避け非婚を通さざるをえない齋院とはいわば喪の状態を強いられる環境だからである。齋院としては五七年にわたつてそれを勤めた大齋院選子のことがよく知られているが、選子が「歌司」や「物語司」を女房たちに割り当て歌や物語に熱中していたのは閉鎖的な環境のなかで気を紛らわすためであつたと思われる。仏事を忌む立場にあつたことも鬱屈を深めるだろう。神に仕える身でありながら、仏道に帰依していった選子は齋院を退下するや出家しているが、齋院は神と仏の矛盾を顕在化させる場であつたといえる。六条齋院周辺の人々も同様の矛盾を感じていたのではないか。最終的に抛り所としたのは神ではなく仏だからである。『治暦四年十二月廿二日庚申祿子内親王歌合』に出てくる宣旨の歌をみてみよう。

年のうちにつもれる罪を残さじと三世の仏の名をぞ唱ふる 宣旨 (引用は『平安朝歌合大成』三による)

かつて齋院に勤めていたにもかかわらず、宣旨は「仏の名」を唱えている。仏事を忌む齋院は決して理想的な環境などではなかったのである。

六条齋院内親王歌合は庚申待ちの際に行われたものが多いが(一〇回に及ぶ)、そのことも鬱屈した状況と関連があるだろう。腹中にいる三尸虫が天に昇って天帝に罪過を告げるのを防ぐため、庚申の夜は眠ってはならないとされていた。それゆえ遊戯に熱中する必要があったのが庚申待ちである。確かに単なる遊戯にすぎない。しかし単なる遊戯が緊張状態をもたらすことは『枕草子』にもみられたところである。「庚申せさせたまふとて、内の大臣殿、いみじう心まうけさせたまへり。夜うちふくるほどに、題出だして、女房に歌詠ませたまふ。皆けしきばみ、ゆるがしいます。」(九五段、角川文庫)。「五月の御精進のほど」の段だが、遊戯だからこそいっそう緊張を増しているといつてよい。

『堤中納言物語』所収の『逢坂越えぬ権中納言』は、天喜三年(一〇五五)五月三日庚申の夜に物語合の場で小式部という女房が提出したことがわかっている。⁴『天喜三年五月三日庚申物語歌合』に同物語を詠んだ「君が代の長きためしにあやめ草千尋にあまる根をぞひきつる」という小式部の歌がみえるからだが、小式部の資料はまさに隠されていた物語の「根」を引き出したことになる。物語の結末は次の通りである。

宮は、さすがにわりなく見えたまふものから、心強くて、明けゆくけしきを、中納言も、えぞ荒だちたまはざりける。心のほども思し知れとにや、わびしと思したるを、立ち出でたまふべき心地はせねど：

(引用は古典全集による)

中納言も姫宮も困惑したまま夜が明けていく場面だが、これはそのまま庚申の夜の現場に重なり合うものであろう。華やかな根合や歌合がいつの間にか苦しいものに転じている。いずれにしても、庚申待ちの遊戯には鬱屈したものがあつたのではないか。

以上のように、菅原孝標女と六条齋院宣旨に共通するものとして、熱狂と鬱屈を指摘しておきたいと思う。⁵

注

(1) 菅原孝標女に関する最近の研究としては、諸家による『更級日記の新研究』（新典社、二〇〇四年）があり、物語と日記の關係が積極的に取り上げられている。なお孝標女作とされる『朝倉』はすでに散逸しているが、『物語二百番歌合』（後五四番右）によれば、その題名は「名のるとも木の丸殿の雲居なる朝倉まではたれか尋ねむ」という歌によっていらしい（『王朝物語秀歌選』岩波文庫）。「名のるとも」という逆接に鬱屈を指摘できるだろう。主人公の歌「あはれとも憂しともえこそ岩代の野中の松の結ばほれつつ」（後六三番右）に詠まれているのはまさに鬱屈である。

(2) 六条齋院祿子内親王および宣旨については、萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂』二・三（同朋舎出版、一九九五・六年）、神野藤昭夫『齋院文化圏と物語の変容』（『散逸した物語世界と物語文学』若草書房、一九九八年）、所京子『六条齋院の事績』（『齋王和歌文学の史的研究』国書刊行会、一九八九年）、小町谷照彦『六条齋院宣旨論』（『平安時代の作家と作品』武蔵野書院、一九九二年）などを参照。久下裕利『狭衣物語六条齋院宣旨略伝考』（『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九二年）が指摘するように宣旨が内親王の乳母だったとすれば、そこには乳房を介した母子關係を見て取ることができる。内親王の実母はすでに不在であり、病氣の内親王を見守る宣旨の鬱屈は増したはずである。内親王の乳母だったからこそ『狭衣物語』の非道な乳母を造型できたのではないか。

(3) 『春記』には「日没之間齋王渡給。女房装束如花。過差無極而已」（永承三年四月一二日条）、「齋王申終許渡給。諸衛前駈……雖有過差之制、不能糾彈也。太鳴許也」（同七年四月一九日条）と記されているが、六条齋院周辺の華麗さとは単純に賞賛を浴びるようなものではない。むしろ非難を浴びてもそうせざるをえない鬱屈したものが認められる。なお、『栄花物語』「けぶりの後」は齋院受難の巻にみえる。秘かに俊房と結婚した前齋院娟子は非難を受け、東宮妃となつて出産した前齋院馨子は若宮をまもなく失っているからである。

(4) 『狭衣物語』巻一にみえる「うき沈みねのみなかる菖蒲草かかるこひちと人も知らぬに」や『逢坂越えぬ権中納言』にみえる歌「昨日こそ引きわびにしかあやめ草深きこひちにおり立ちしまに」などは明らかに『源氏物語』六条御息所の歌を踏まえている。また六条齋院の歌「神垣にかかるとならば朝顔もゆふかくるまでにほはざらめや」

(『詞花集』卷三) は明らかに『源氏物語』朝顔の姫君を踏まえている。つまり、代々の齋院が生み出した文事には『源氏物語』に登場する朝顔の齋院の影響を見て取ることができるのであり、娘の齋宮とともに伊勢に赴き仏事を忌む環境に身を置いた六条御息所の影響を見て取ることができるのである。齋院世界において朝顔の姫君と六条御息所はモデルとして機能しているように思われる。

(5) 『四条宮下野集』は後冷泉天皇皇后四条宮寛子(頼通女)に仕えた女房による私家集だが、そこにも熱狂と鬱屈を見て取ることができるのではないだろうか。「めでたくをかしき事どもを、見てのみ止むが飽かずおぼえしかば、いと事ゆかずあやしう物に書きつけてありしを、たびたびの火に失せにしかば、のちのちは、年つもり、もの憂くなりて止みぬるに…」、「世中変はりて、哀れにいみじき事多かりしほどの事ども、われも人もあまたありしかど…」(新古典大系)。『讃岐典侍日記』は堀河院に仕えた女房による日記だが、その抑鬱も付け加えておきたい。「五月の空もくもらはしく、田子のもすそもほしわぶらんもことわりと見え、さらぬだにもものむつかしきころしも…かきくらさるるここちぞする」(古典全集)。この冒頭部分にも「姨捨」の一語がみえる。「ものもいはれず、あさましう、むねふたがりて」と記す『成尋阿闍梨母集』の鬱屈も、この時代特有のものと考えることができるかもしれない。こうした事態を漢語で表せば「鬱々」ということになる(たとえば『明衡往来』中本には「鬱々之处」とみえる)。

二 平安後期物語の世界

ここでは『浜松中納言』『夜の寝覚』『狭衣物語』を取り上げ、それぞれ建築・音楽・仏教という観点から分析を開始してみたい。なぜ、そうした分析視点が設定されるかはそれぞれの作品が正当化してくれるはずである。

1 『浜松中納言』と建築——同一性の鬱屈

『浜松中納言』は建築に注目するところから入っていき¹たい。後述する通り、建築が『浜松中納言』の特質をよく示しているからである。主人公の中納言は、亡父が唐土の第三皇子に転生したことを知って渡唐し対面する。

三の御子は、内裏のほとり近く、河陽県といふところに、おもしろき宮造りして、そこをぞ御里にし給へる。母后ももろともに住み給ふ。皇子の御消息あり。かぎりなくうれしくて参り給へり。ところのさま、ほかよりいみじくめでたく、水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢のけしきもいみじうおもしろし。(三四頁)

第三皇子が住む宮殿の様子だが、ほとんど異国であることを感じさせない。十月に入つて再び訪れ琴を弹奏する場面をみてみよう。

辰巳の方に、大きな山より滝高く落ちたるを、湧きかへり待ち受けたる岩のたたずまひ、世のつねならず。たぎりて流れ出たる水のほとりに、いろいろうつろひわたれる菊の花の、いとおもしろきをもてあそぶるなるべし。そなたのつまの御簾捲きあげて、いみじうしやうぞきたる女房、うるはしく髪上げ、裙帯、領巾などして、いろいろ団扇をさし隠しつつ、錦を敷ける縁に、十余人ばかりならびゐたり。上手の書きたりし唐絵にたがはず。上げたる御簾のほどに、紫の唐の裾濃の御几帳うち上げて、唐組の紐、長やかにうるはしきを押しやりて、琴弾き給なり。(三九頁)

何とか異国らしくみせようとしているけれども、具体的な描写は乏しく、ただ「唐絵にたがはず」と記されるだけなのである。このとき中納言は美しい唐后を垣間見て、恋に落ちる。夢告に従つて結ばれると唐后は懐妊、出産するのだが、三年が経過して中納言は唐を離れざるをえない。唐后は「胸ふたがりて、顔の色もたがふ心地」となる(九五頁)。巻一の末尾、「屈じにける心」が強調された別れの宴の場面をみてみよう。

深き夜の月、浮雲だになびかず澄めるに、はるかに広き池の中島に作りかけたる楼台に、三四五の君、琴どもかき合はせて、月をながむるほどなり。やがて、「こなたに」とて入れたてまつれば、中島の汀より横たはれ生ひ出でて、楼台の上にさしおほひたる紅葉の、着てもまことに夜の錦かと思へたるに、御簾捲き上げて、几帳ばかりをうちおろして入れたてまつれり。つねはいかがあらむ、おもしろき池の上、紅葉の影にて、いとうるはしくしやうぞき、髪上げてゐたる、月かげともいづれともなく、絵に描きたるやうなり。三の君琴、四の君箏の琴、五の君琵琶、かき合はせたる声々、いづれともなくおもしろし。(一二〇頁)

「楼台」が異国らしさを示してはいるけれども、結局は「絵にかきたるやうなり」の一言で、具体的な描写が回避

されてしまうのである。巻一の冒頭近くにも「この関に御迎への人々参りたり。そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり」とあったが（三二頁）、絵画への同化が異国を描く『浜松中納言』のレトリックである。

「楼台」は日本を舞台にした巻二にも登場して、やや異国らしさを減じている（一四一頁）。しかも巻二では逆に日本が唐国に似てしまうのである。「ところのさま、山と海と帯びたり。みぎは見えていとおもしろきも、蜀山の大臣の御住まひ、まづ思ひ出でらる」（一四二頁）。

巻三の冒頭、唐から戻った中納言は唐后の手紙を届けるため、唐后の母を世話する吉野の聖のもとを訪れる。

かくておはし着きたれば、山のかたに堂いとをかしう建てて、わがゐところは、廊だつものを、いとかりそめに造りて住まひたるありさま、鳥の音だに、世のつねなるは聞こゆべうもあらぬ世界に、呉竹を隔ててぞ人の家は見ゆる。たれかはかかる住まひする人のあらむと、見つ入り給へば、聖思ひも寄らず、あさましげに思ひおどろきたるさまかぎりなし。

（二〇〇頁）

山奥らしく描いてはいけるけれども、吉野に関しても具体的な描写は乏しいといえる。唐土にも似たような場所があった。「山のさま高くはげしくて、滝の落つる水の流れ、草木のなびきも世のつねならぬさまに、大臣の御すみか、いといみじくおもしろくめでたし」と記された蜀山である（八三頁）。また都にも似たような場所ができる。「山かたかけ池に作りかけて、えも言はぬ堂のめでたき、別に建て添へて、たてまつり給はむことをおぼし急ぎて」造られるからである（一八二頁）。そこでは親に知られることなく懐妊し出産した尼姫君が「あいのう胸ふたがりておぼさむも罪深く」という状態で暮らすことになる（二五六頁）。こうして『浜松中納言』は複数の場所を描きながら、いずれも具体性に乏しい曖昧な空間しか設定できないのである。それは異なろうとしつつも同一でしかない空間である。同一でしかないにもかかわらず異なろうとする空間である。鎌倉時代の物語評論『無名草子』は『浜松中納言』について「余りに唐土と日本と一つに乱れ合ひたるほど、まことしからず」と評しているが、空間設定の曖昧さも否定しがたい。

吉野の聖から中納言は、唐后の母にもう一人の娘がいることを知らされる。それが吉野の姫君である。吉野の姫君

は中納言に託されるが、式部卿宮に盗み出されてしまう。そのきっかけとなるのは、建物の造営である。「大将殿の造り給ふべきところありければ、つごもりに、式部卿の宮の上、みな引き連れて、中納言殿に渡り給ふ」と記されるが(三四三頁)、造営にかこつけて二つの家を混じり合わせているといつてよい。吉野の姫君は盗み出されたものの中納言のもとに舞い戻り、東宮となる式部卿宮のもとに入内する。しかし誰とも契ることなく懐妊しており、夢によって唐后の転生することが告げられる。吉野の姫君と結ばれず、東宮妃として世話をしなければならぬ中納言は苦しむ。ここで注目したみたいなのは、巻五の末尾近くにある次の一節である。

おぼろけならぬ御ころさしにこそは、と見知る心はさまざまなるに、行く手におぼし棄ててあらば、心やすく心にまかするかたはありとも、また、いかに心苦しからましなど、かたがたに思ひつづけられて、打つ墨縄にあらぬぞ苦しかりけるに、年もはかなくかへりぬ。

(四五〇頁)

「打つ墨縄にあらぬぞ」には古歌「とにかくに物は思はず飛驒たくみ打つ墨縄のただ一筋に」(『拾遺集』恋五・人麻呂)が踏まえられており、ただ一筋に思慕することができないという。唐后にも吉野の姫君にも一途になれない主人公の特質をよく表しているといえるが(『無名草子』は「まことの契り結びたる人のなくて」と評する)、それは唐にも大和にも一本化できない『浜松中納言』の特質でもある。しかし、二者の間にどれほど違いがあるかという点ほとんど差異はない。二つの世界を描いても、転生を描いても結局は同一であるしかない、そうした鬱屈した物語が『浜松中納言』である。

ここで「墨縄」の語誌を一瞥しておこう。まず『万葉集』である。

かにかくに物は思はず飛驒人の打つ墨縄のただ一道に

(引用は古典全集による、巻一一、二六四八)

『律令』によれば飛驒の匠は毎年かなりの数が都に上ったようだが(「凡斐陀国、庸調俱免。每里点匠丁十人」賦役令)、飛驒の匠が木材に印をつけるため用いた「墨縄」は都の建設にとつて不可欠のものであろう。条理を示す「墨縄」は律令制に見合うものといつてよい。『日本書紀』には次の歌謡がみえる。

あたらしき 韋那部の工匠 懸けし墨縄 其が無けば 誰か懸けむよ あたら墨縄

(引用は古典大系による、雄略一三年九月)

「韋那部」は木工を専業とする部民だが、朝鮮半島の出身で造船技術も備えていたようである（「多船見焚。由是、責新羅人。新羅王聞之、警然大驚、乃責能匠者。是猪名部等之始祖也」『日本書紀』応神三十一年）。その腕前は卓越しており、手元が狂うのは女性の裸体に心を乱したときだけである。天皇は「墨繩」のごとく厳密な技術者を抱えていたわけである。また『万葉集』の長歌「好去好来歌」には次の一節がみえる。

墨繩を延へたるごとく あぢかをし 値嘉の岬より 大伴の 御津の浜辺に 直泊てに み船は泊てむ

（巻五・八九四）

「墨繩」を打ったように「御津の浜松」へと伸びる直線の航路、それは様々な技術を背景とした天皇の力を示すものにはちがいない（「墨繩」は「浜松」の物語に至る鍵語である）。また『今昔物語集』には次の説話がみえる。

木ノ本ニ米散シ幣奉テ、中臣祓ヲ令読テ、杣立ノ者共ヲ召テ、繩墨ヲ懸テ令伐ルニ、一人モ死ヌル者無シ。（中略）其後二木倒レヌ。皆伐リ揮テ御堂ノ壇ヲ築ク。（引用は古典全集による、巻一一・二二）

推古天皇の時代に本元興寺が建立されたときの靈驗譚である。槻の大木を伐ろうとするたびに死者が出るが、僧が神木の秘密を聞き出し、「繩墨」を掛けて伐採し寺を造営する。「繩墨」によって古い信仰が切断され、新しい建物が打ち立てられているのである。

『拾遺集』にみえる歌「とにかくに物は思はず飛驒たくみ打つ墨繩のただ一筋に」は『万葉集』歌の異伝だが、前後をみると、それぞれの位置づけが異なっていることがわかる。『万葉集』では「寄物陳思」に分類されていたが（すぐ後ろに続くのは「あしひきの山田守る翁が置く鹿火の下焦れのみ我が恋ひ居らく」という歌であり、「寄物」が目を引き）、『拾遺集』では「恋」に分類されているからである（すぐ前に置かれたのは「かくばかりうしと思ふに恋しきは我さへ心二つ有りけり」という歌であり、「心」が目を引き）。寄物陳思から恋の歌へといってもよいが、「物」よりも「心」の比重が高まっているように思われる。次に藤原定家『拾遺愚草』の歌をみてみよう。

建久七年内大臣殿にて、文字をかみにおきて甘首よみ侍りしに、恋五首、かたおもひ

ひだたくみうつすみなわを心にて猶とにかくに君をこそ思へ（引用は『新編国歌大観』三による、二五九七）
ここでは「打つ墨繩」が「心」のあり方を示すものとなっている。もはや物質世界は問題ではない。こうした中世

和歌の観念的な世界を『浜松中納言』は先取りしているといえるだろう（『松浦宮物語』を著した定家が『浜松中納言』に関心を寄せるのも当然である^③）。『文机談』には「これかならず師説のすみなわをただすべきにあらず」という一節がみえるが、「墨繩」は精神の規範となっているのである。なお『六条斎院祿子内親王物語歌合』には「打つ墨繩の大將」といった物語が提出されており、時代状況に見合う言葉でもあったようである（『とりかへばや』巻二には「宰相はうち別れぬればいみじき文書をしつつ、打つ墨繩にはあらず」とみえる、新古典大系一九八頁）。

次に、『浜松中納言』に特徴的にみられる「本体」という言葉に注目しておきたい。唐土に渡った主人公の行為は「本体」の探求といった様相を呈しているからである。「本体も知らぬ国に、われはかりそめのほかの人にて、夢のうちにも、かやうのことにつけて、いささかも、すきずきしき、なん人ぞと言はれじと思ふに、たづぬべきかたもなし」（七三頁）。唐土のことを「本体も知らぬ国」と呼んでいるが、契りを結んだ相手が唐后であるということさえわからないのである。その唐后の素性は巻三の冒頭で「本体は、おのづから聞かせ給ふやうもはべらむ」と吉野の聖によって語り出される（二〇二頁）。唐の大臣と上野宮の娘の間に生まれたのが唐后であり、唐后にとっては異父妹に当たる姫君が吉野ににいるという。「本体」の一語は姫君との出会いの場面にもみえる。

河陽県の御ゆかりをたづね聞こえざらましかば、かかる人をも見ましやと、ただひとりの御ゆかりの本体を思ひ出づるに、あはれにかなしう…

（三一八頁）

唐后の母親が「ゆかり」であり、唐后本人は「ゆかりの本体」である中納言は認識している。それに対して、吉野の姫君を盗み出したものの、式部卿宮はその素性がわからず苦慮している（「その本体をたづぬべきやうもなく…」四一五頁、「なほ本体をたづねて…」四一六頁）。「本体」を探し求める式部卿宮の姿は、唐后を探し求めた中納言自身のかつての姿に似ているが、現在の中納言ははるかに優位にある。「この人の本体をばこの宮もえ知り給はじ」と考える中納言は「本体」の何たるかを確信しているからである（四一七頁）。確かに唐后と吉野の姫君は別々の個体である。しかし、『浜松中納言』における唐土と日本が曖昧で区別しがたいように、唐后と吉野の姫君も曖昧な同一性に収まってしまうように思われる。しかも夢告によれば、唐后は転生という形で吉野の姫君の腹に押し入っている^④のである。唐后と吉野の姫君の曖昧な同一性、それが『浜松中納言』の本体にはかならない。

最後に、現存『浜松中納言』の冒頭と結末に注目しておこう。

孝養のころざし深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺といふところに、七月上旬の十日におはしまし着きぬ。そこを立ちて、杭州といふところに泊り給ふ。その泊り、入江のみづうみにて、いとおもしろきにも、石山の折の近江の海思ひ出られて、あはれに恋しきことかぎりなし。
(三一頁)

卷一の冒頭だが、ここでの航海は技術の厳格さによるものでもない。強いといえば「孝養のころざし」という観念的な力によるものである。「心ざし」ゆえに移動の障害は何も存在しない。そして異国の風景はさまざま自国の風景と同一視させられてしまう。『うつほ物語』俊蔭卷の漂流譚と比べてみれば違いは明らかだが、ここからすでに『浜松中納言』が同一性の物語であることが垣間見えてくる。⁽⁵⁾ 卷五の末尾はどうか。

その年、もろこしより人多く渡れるよし、大忒の申したるをうち聞くより、胸、心さわぎまどふに、送りに来たりし宰相のもとより消息あり（中略）見るに、見し夢は、かうにこそ、とおぼし合はするにも、いとどかきくらし、たましひ消ゆる心地して、涙に浮き沈み給ひけり。
(四五―頁)

唐后が亡くなったことを知らされた中納言は、過去の夢の意味をはじめて悟る。夢が符合し、同一性が回帰するといつてもよいが、夢告と転生の末に魂は消え、活力を失い、涙に浮き沈みするだけになってしまう。生気を失った世界がここにはある。「やうやう夢さめて、こはいかなることぞと思ひまどひ給ひて、やがて、たましひもなく、ものもおぼえず、消え入るけしきなる…」とあつて、吉野の姫君も一度、魂を消している（四〇―頁）。『源氏物語』において魂は離れるものではあつても消えるものではなかった（「物思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」⁽⁶⁾ 葵卷、「魂はまことに身を離れてとまりぬる心地す」若菜下卷）。しかし平安後期物語の魂は活発に活動するものではなく、不活発で消え入るものなのである。

注

(1) 『浜松中納言物語』(新古典全集)に研究文献一覧があるが、物語内容の再建を越える研究は少ないようである。研究史については鈴木泰恵「浜松中納言物語」(『日本古典文学研究史大事典』勉誠出版、一九九七年)が詳しい。神田龍身「『浜松中納言物語』幻視行」(『文芸と批評』五の五、一九八〇年)は憧憬という点を強調するが、本稿は抑鬱的な同一性を指摘するものである。したがって異郷論・異界論的な視点はとらない。

(2) 「横目」とは他に心を奪われ、二心をもつことである。『浜松中納言』では「中納言は、大将殿の姫君の、世をそむき給ひにしに定まり給ひて、横目なくありつき給ひにたると聞く」と語られているけれども、実際は「横目」をしている(二三三頁)。「夜の寢覚」の男君は「片時横目すべくもあらず、年月を経て恋わびわたりつるも、誰ゆゑならむ」(五一二頁)と語っているにもかかわらず、「横目」してはいないわけではない。「しばし横目堪へがたかべきに、さすがに…」(三三三頁)、「横目なからむにてだに、飽く世あるまじきを、限りあれば…」(五〇二頁)という状況だからである。「横目」すべくもないにもかかわらず「横目」してしまうところに平安後期物語主人公の鬱屈があるのかもしれない。『宇治拾遺物語』巻九第三話には「その後思ひかはして、また横目する事なく住みければ、子ども産み続けなどして、この敦賀にも常に来通ひて、観音に返す返すつかうまつりけり」とあるが(古典全集)、説話のように単純な構造には収まらないのである。なお『狭衣物語』の歌をみると、一筋ならぬ恋といったカテゴリーが設定できそうである(「我が恋の一筋ならず悲しきは逢ふをかぎりと思ひだにせず」巻二・二八二頁、「我もまた益田の池の浮きぬなはひとすぢにやは苦しかりける」巻三・二七六頁)。「堤中納言物語」にも「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞみだるらむ」とみえる(『ほどの懸想』)。

(3) 『浜松中納言』と『松浦宮物語』に相違があるとすれば、それは後者が阿修羅の力を導入しているという点であろう(「宇文会といひし、まことは阿修羅の身のむまれきて、すでに我国をほろぼすべき時いたれりし…」角川文庫)。

(4) 『今昔物語集』巻二〇第一話はインドの天狗が法文を唱える「水ノ本体」を探し求めて中国から日本に渡り、親王の子に転生する話である。「本体」の探求は渡海、転生と不可分なのかもしれない。『とりかへばや』巻一には

「はかなくかき鳴らし給琴の音も、唐国の本体おぼえて」とあり（新古典大系一五三頁）、謡曲『殺生石』には「同じくは本体を二たびあらはし給ふべし」とある（新古典大系四四四頁）。

(5) 石川徹「夜半の寢覚は孝標女の作と思う」（『王朝小説論』新典社、一九九二年）は『朝倉』『浜松中納言』『夜の寢覚』『更級日記』に「変らざりけり」と結ぶ歌がみられることを指摘しているが、そこにも抑鬱的な同一性を見て取ることができる。

(6) 『心高き宣旨』はすでに散逸した物語だが、そこに「嘆くまに魂もみななくなりて今はむなしき骸と知らずや」という歌があつたことが知られている（『物語二百番歌合』後七八番右詞書）。魂が消え果てて、不活発な屍だけが残されているというのは平安後期物語にふさわしい状況であろう（散逸して歌だけが残された物語とは「むなしき骸」の状態なのかもしれない）。

2 『夜の寢覚』と音楽——懷妊の鬱屈

『夜の寢覚』は音楽に着目するところから入っていき⁽¹⁾たい。八月十五日の夜、主人公の女君が琴を弾いていると、夢の中に天人が現れ琵琶を教えてくれる。

夜いたく更けて、みな御琴にやがて傾きかかりて御殿籠り入りたるに、小姫君の御夢に、いとめでたくきよらに、髪上げうるはしき、唐絵の様したる人、琵琶を持て来て、「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに聞こえつるを、訪ね参で来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」とて、教ふるを、いとうれしと思ひて、あまたの手を、片時の間に弾きとりつ。「この残りの手の、この世に伝はらぬ、いま五つあるは、来年の今宵下り来て教へたてまつらむ」とて失せぬと見たまひて、おどろきたまへれば、暁がたになりけり。

（一七頁）

「髪上げうるはしき、唐絵の様したる人」と記されているので、天人には中国人のイメージがあるといえる。⁽²⁾「つねに習ひし箏の琴よりも、夢に習ひし琵琶は、いささかとどこほらず、たどらるべき調なく思ひつづけらる」と続く

が、この作品は音楽のように停滞しない物語を予想させる。夢の楽器のごとき自動演奏が開始されるからである。

翌年の八月十五夜になると、約束通り再び天人が現れる。

残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」とて、帰りぬと見たまふに、この手どもを、覚めて、さらにとどこほらず弾かる。(二〇頁)

「いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世」が予言されるが、音楽のほうは滑らかな演奏が続いている。しかし、音楽と物語の調和が続くのはここまでである。翌年はもはや天人が現れない。

またかへる年の十五夜に、月ながめて、琴、琵琶弾きつつ、格子も上げながら寝入りたまへど、夢にも見えず。うちおどろきたまへれば、月も明けがたになりけり。あはれに口惜しうおぼえ、琵琶を引き寄せて、

天の原雲のかよひ路とちてけり月の都のひと問ひ来ず (二〇頁)

「天の原雲のかよひ路とちてけり」とあるように、天上との交通は断たれてしまった。この後、女君は姉の夫となる男君と契りを結んでしまうのだが、『夜の寢覚』は天人が迎えに来ないかぐや姫の物語といった様相を呈するのである(寢覚の君は見捨てられたかぐや姫といってもよい)。女房たちは「おのおのみな屈じいたげに」思い(六二頁)、「胸ふたがりて夜昼嘆かしく」なり(一一三頁)、男君は「思ひ屈じたる心地」を抱き(八七頁)、「結ばほれ」ている(一七三頁)。女君はその関係を兄に知られることを恐れ(「胸ふたがりて、我も涙をとどめやらで、また沈み臥したまひぬ」一一六頁)、姉に知られることを恐れ(「胸ふたがる心地すれば…」一六〇頁)、抑鬱を深めていく。父親にはそんな娘の姿が「世を屈じしめりたまひつるなつかしさ」と映っており(一九八頁)、「いいたく屈じたまへる御心」を慰めようとする(二〇二頁)。姉もまた「心に結ばほれてのみありわたりたまふ」、「世を思ひ結ばほれたる気色にながめたまへば」という状態である(一一二頁、一一七頁)。

音楽への熱狂は失われてしまった。代わって訪れるのは鬱屈した睡眠障害であり、その連続が『夜の寢覚』の世界なのである。作品の冒頭で「人の世のさまざまなるを見聞きつるに、なほ寢覚の御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな」と語られていたが、「心づくし」とは抑鬱的な事態にほかならない。それはプレグナントな言葉であろう。

天人出現という非日常的な出来事の後は、鬱屈した現実が訪れる。天人の来訪が理想化された他者の来訪であったとすれば、その熱狂に対する反動が次にやって来るのである。それはマタニティ・ブルーのような抑鬱だといつてよい。⁽⁴⁾平安後期物語の強迫的な主題の一つは正体不明の男と契りを結ぶというものだが、一夜の契りの結果、何が生まれるかわからないという不安を抱えることになる。平安後期物語に漂っているのは、そうした出産恐怖の不安である。

角生ひとりけむ児のさましておはせむだにも、飽かず夢のやうなる契りの形ともうち見むあはれは、浅からじを、押し量りおぼしつるよりもめでたく、うつくしげなる…

(一五五頁)

これは出産した女君の感慨ではなく、子供を目にした男君の感慨だが、『夜の寢覚』の作者が女性と推定される以上、そこには産む性の感慨が混じっていると考えてよい（男君自身も十分抑鬱的であり、その意味では産む性に等しい、「ものをいみじと思ひ入り、屈んじしをれたまへる」一〇九頁、「胸ふたがりて」一三七頁）。角を生やした鬼を産んでしまうという不安を作者は抱えていたのではないだろうか。それは自らが鬼になる危険性を孕んだ不安である。

いと角生ひ、目一つあらむが、なほ品ほどもあなづらはしからざらむ人聞きこそ、深き心ざしなくとも、用ゐらるべきものにははべれ。

(四五頁)

女はなぞ、かたちは角生ひても、心こそいるべきものなれ。かたちよからむ女子は、捨てぞしつべき。かたじけなく、親の面伏せなる類を見るに、いと心憂し…

(一八四頁)

女性の容貌がたびたび話題になっており、容貌よりも心を重視するべきだとも語られているが、それは自分自身が鬼になるかもしれない不安の裏返しであろう。鬼を産んだ者は自らが鬼ということにならざるをえないからである。平安後期物語でしばしば言及される「夷」が同時代の合戦を意識した表現だとすれば（古典大系『狭衣物語』補注八七）、物語は外部の「夷」と内部の「鬼」にともに脅かされていたといえる。平安後期物語に母性愛の単純な賛美を認めることはできない。

『夜の寢覚』の女君は正体不明の異性と契りを結んでしまうが、『浜松中納言』の主人公もまた正体不明の異性と

契りを結んでいた。相手はわざと正体を隠した唐后である。「后も、かかるべうてや、おどろおどろしきさとしもありて、おぼえぬところに来にけるにこそ。宮のうちならましかば、いみじうとも、かからましかば、とおぼしまどはるれど、またおしかへし、思ひかけず、さるべき契りにてこそあらめ、今はいかがはせむ。いかにしてわれとだに知らせでやみなむ、とおぼしつづくれば、みづからもおぼしさをぐけしきも見せ給はず」(六九頁)。

ここで興味深いのは唐后のほうが行動の主体、中納言のほうが行動の客体にみえる点である。中国と日本の力関係が反映しているのかもしれないが、唐后のほうが意志的に行動しているのである。「心迷ひして、胸ふたがりて…」、「そののち、いという思ひ沈めり。屈指面瘦せて…」と語られる中納言のほうが懷妊し衰弱しているようにみえる。もちろん、懷妊した唐后も「むなしうなりなむかなしさを、おぼし入るほど堪えがたき」状態に陥ってしまう(八八頁)。

唐后の異父妹に当たる吉野の姫君は、唐后に代わって中納言の思慕の対象になるという点で唐后の子供のような位置を占めている。

ただ言ひ知らず恐ろしげにて、角など生ひたりとも、うとましう思ひのがるべきにもあらぬに、つくづくと見つ
つ(中略)めでたうらうたげにをかしきけしき、かぎりなき人ざまなる…(三〇三頁)

これは吉野の姫君を目にした中納言の感慨だが、『浜松中納言』の作者もまた鬼を産むかもしれない不安に取り憑かれていたのである。吉野の姫君自身もまた、そうした不安を共有するだろう。誰とも契ることなく懷妊する吉野の姫君は、真に正体不明の異性と契りを結んだともいえるからである。「二十がうちに妊じ給はば、過ぐしとほしがたうおはします人と見え給ふこそ、いとたいだいしけれ」(三三一頁)という吉野の姫君に対する警告には出産への恐怖がうかがえる。

唐突に日本人の生まれ変わりを出産した唐后、唐突にその唐后の生まれ変わりを出産することになる吉野の姫君、そうした人物を登場させる『浜松中納言』には不可解なものを出産せざるをえない女性の恐怖と魅惑といったものを見て取ることができる。それは女性に限らず物を作り出す作家の不安でもあるが、メアリー・シェリーの小説に倣って、フランケンシュタイン・コンプレックスといってもよい。^⑥

『夜の寢覚』は巻二も巻五も懷妊の苦しみから始まっている。注目されるのは巻五の冒頭である。「かしこには、五月つごもりごろより、御心地例ならず苦しうおぼさるれど……齋宮の御有様を、あはれにうらやましくも行ひすませたまふかな……」（四三二頁）。女君は前齋宮の境遇に憧れているが、出家した状態こそ懷妊の苦しみからもっとも遠い状態なのである。

男君はすぐさま女君の妊娠を見抜き（「四月ばかりになりたまひにたる御乳の気色など、紛るべくもあらぬさまなる……」（四七六頁）、女君以上に抑鬱的になり（「月日の過ぐるままに、胸ふたがりてこそわびしくおほゆれ」五一九頁）、自ら出産に携わっている（「生まれ落ちたまふすなはちより、抱き上げて、臍の緒なども我が御手づから、他人に手触れさせたまはで……」（五二四頁）。男君の従妹に当たる督の君が懷妊し「まいて異御方々胸ふたがりて」とあるが（五一六頁）、女君と督の君という妊娠した女性同士を対面させるところも、妊娠と出産に拘る『夜の寢覚』にふさわしい設定である。⁷⁾

時代に取り残されつつ作品を生み出す作家の不安にも重なるが、妊娠したまま置き去りにされる姫君の状況ほど抑鬱的なものはないだろう。すなわち、『浜松中納言』の尼姫君（「あながちに隔てむすばはれ」一八三頁）、『夜の寢覚』の女君（「あるにもあらず沈み入りのみ臥したまひたる」九九頁）、『狭衣物語』の女二宮（「ものをのみ思しくづはれて臥し沈みたまへる」巻二・一九四頁）の状況である。『更級日記』で乳母出産の際に孝標女が驚くほど落ち込んでいたことが想起される（「いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ率て行かるこち、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ」）。孝標女は姉が出産後まもなく亡くなった際もひどく落ち込んでいた（「五月のついたちに、姉なる人、子うみて亡くなりぬ。よそのことだに、幼くよりいみじくあはれと思ひわたるに、まして言はむかたなく、あはれ悲しと思ひ嘆かる」）。いずれの場面も荒れ果てた飯屋に月光が射し込む点で共通しており、不吉さを増している。

姉が亡くなったとき、探し求めていた物語が届けられるのだが、その題名は「かばねたづぬる宮」だったという。この挿話は象徴的であろう。欲望と物語のずれや物語と死の一致を示しているからである。いずれにしても物語を尋ねると必ず死が訪れるのである。⁸⁾ 孝標女は「うづもれぬかばねを何にたづねけむ」と後悔しているが、『更級日記』

には「物語たづぬる女」という題名こそふさわしいのかもしれない。『夜の寢覚』に重ねていえば、中間欠巻部分で女君の姉が出産直後に亡くなっている点が想起される（女君は姉の子供を引き取って養育するが、その乳母たちは「いと屈じいたく」思っている、四九八頁）。

『夜の寢覚』の一文が長くなるのは妊娠を契機としてである。巻三に入ると、それが異様な長さに達する。たとえば巻三の冒頭は「なになり袖の氷とけず」と得意の表現で始まった朝から、年末、年始、初子の日に及び、「いとばななとうつくしげなり」と姫君の顔で結んでいる（二二九―三二頁）。「胸ふたがりながら、我が心をも執念く念じつつ」一文が持続し、二人の間に生まれた子供に辿り着くのである。長文に身を投じるのは男君だけではない、女君を垣間見た帝もまた一文を長く引き伸ばし続ける。それが「面影は身に添ひぬるやうに、わりなうおぼしめさるれば、つくづくと端近うながめさせたまひて…しほしほとうち濡らさせたまへるや」の一文であり（二五七―九頁）、「さやかなりつる火影に、やがて魂は立ち添ひぬる心地して、我は我ならぬやうにおぼしめされつつ…昼などもおはします」の一文である（二六〇―一頁）。帝を見守る中宮は、当然「結ばほれたる心地」になる（二六二頁）。

帝が母親、大皇の宮に訴える場面も長い一文で構成されているが（二六四―七頁）、帝が部屋に侵入して女君をかき口説く場面も長大である。「人の聞き思はむさまもうち思ひつづけられず…いみじく屈じ卑下せられて…思ひまどはるるや」（二七一―四頁）、「せむかたなければ…言ひ知らずなつかしう、らうたうぞあるや」（二七四―七頁）、「さるは、いささか、ひきつくるひ、世のつねなる有様にて御覽ぜられむとはおぼえず…さすがにいと執念くて、靡くべくもあらず」（二七七―八一頁）。長い一文のなかで女君は魂を失い、自分の心が自分から遠ざかっていくのである（「昨夜に心は尽き果てて、身に添ふ魂もなくなりけるにや、二つにとりては、さはいかが、それをば、今はじめて、口惜し、いみじとあきるべきにもあらずかしと、うち鎮むる心も、我ながら他人なりけりと見ゆる」三二一頁）。男君のほうは、当然「他事なく思ひ結ばほれつつ」日々を送っている（三〇五頁）。

特に注目したいのは巻四冒頭近くの一文である。長いので、ところどころ省略して引用する。

人々の見思ひ、督の君などの、さまざまにもと思ひたまふらむほどの、これも、なのめならぬ恥づかしさに……

と、わりなくおぼいたれど……と、尽きせずくねくねしき御氣色に、つつましく、せめても言はれず……と、尽きせず悲しう思ひ入るに、まことに心地もかき乱るやうになりて、いといみじう心苦しげなる御氣色を、我もうち泣きたまひて、慰めわびたまふに、ことと明くなりぬめり。
(三三二―三頁)

「くねくねし」は男君の性格を言い得ているというが(新古典全集頭注)、単に男君の性格を示すだけの言葉ではないだろう。『夜の寢覚』の文章自体が「くねくねし」だからである。相手の思いを先取りして自らの思いを募らせる、相手の「氣色」を察し自らの言葉を封じ思いだけを「尽きせず」募らせる、これが『夜の寢覚』の抑鬱的な文章の特徴なのである(「氣色」「尽きせず」がそれぞれ繰り返し返されている)。夜明けの時間だけが「くねくね」とした長い一文をかううじて停止に追い込むことができる。卷二には「色に出で、きこえ寄りたまはぬほどなれば、ただあれにもあらず、ものくねくねしう結ばほれ、おほかたなるさまにて過ぐしたまふ」とあつたが(二四七頁)、「くねくね」とした鬱屈だけが残る文章といつてもよい。女一宮と結婚した男君は後悔し(「また引き返し胸ふたがりて、なぞせしわざぞといみじううち嘆かれぬる」三三三頁)、帝に迫られた女君は鬱々としている(「しをれ暮らすよりほかのことはなかりつる…飽かず心苦しとのみ思ひ結ばほれて」三三八頁)。

卷四の女君は生き霊になつて現れたと噂され、鬱屈を増す。「あることも枝葉をつけ、なきことをもつきぎしう、かかる折は言ひ出づるを、くはしう人告げ申すに、いとあさましう、胸ふたがりたまひぬ」(三八七頁)。男君も氣に病み(「胸ふたがり涙落ちて」三八三頁、「胸ふたがりて、ゆゆしう涙のこぼれぬべき」三八六頁、「胸ふたがりて」三九三頁)、女君に逢えない娘たちも塞ぎ込んでいる(「恋ひ屈じ入りたまひたりつれば」三四〇頁、「忍び音がちに屈んじたまへる…」四二四頁)。女一宮のことを氣にする男君は鬱屈し(「またいとほしく胸ふたがりつつ」三九五頁)、女君を陥れようとして失敗した大皇の宮も鬱屈するほかない(「くねりさいなみ」三九三頁、「世を恨みくねらせたまふ」四七八頁)。

卷五の女君は出家を思い詰めるが、父親に反対されることを心配したり(「胸ふたがりて心地悪しく、例の寝られぬままに…」四三四頁)、実際に男君に反対されたりして意氣消沈している(「あさましきに胸ふたがりまさりぬれど…」四五〇頁)。男君は「艶に結ばほれたまひたりや」と恨む(四八四頁)。出家の氣配を察知した男君はすべて

の事情を女君の父親に打ち明けるが、その場面が興味深い。

…とかき崩し、うち泣きうち泣ききこえたまふ気色の心深うあはれげなるに、入道殿、すべてすべて目も口も一つになる心地したまひて、あさましきに、とばかりもの言はれたまはず。
(四五八頁)

「目も口も一つになる」というのは開いた口が塞がらないような強い驚きの表現である。類型的な表現として片づけることもできるが、しかし『夜の寢覚』の場合はそれに収まりがつかないように思われる。事実を聞かされた者は絶句の直後、饒舌な語りと心中表現を始めるからである。そこでは視線が停止され口での語りや心中での語りが饒舌をきわめ、まさに「目も口も一つになる」事態が生起しているのである^⑩。父親は女君を入内させなかったことを後悔してもいる（「心細くあり果てぬる御身と、生ひ先なくおほし屈ぜられて…」四七二頁）。男君は女君に寄り添うことができたが、それでもかつての鬱屈が思い出されるといふ（「その折りの心尽くし、今さへ胸ふたがりつつ」四八七頁）。

『無名草子』は「寢覚こそ、取り立てていみじきふしもなく、また、さしてめでたしと言ふべき所なけれども、はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきもの」と評している。「散る心もなく」と述べるところは、ひたすら思い詰めていく『夜の寢覚』の鬱屈した物語にふさわしいといえる。主体的に生きたいというのが女君の願いであるとしても、むしろ主体ならざるものに規定された主体の構造を陰鬱に浮き彫りにしているのが『夜の寢覚』という作品であろう（「我が身ながら我が身とはおぼえぬ」八三頁、「心のほかの心」三八八頁）。書きつつある作者や読みつつある読者は、主体が主体ならざるものに規定されていることを陰鬱な楽しみとともに確認するのである。

『無名草子』は『夜の寢覚』の欠点にも言及している。それは末尾欠巻部分で女君が生き返るところらしい。「返す返す、この物語、大きな難は、死にかへるべき法のあらむは、前世のことなればいかかはせむ、そののち殿に聞きつけられたるを、いと浅ましなとも思ひたらで、事もなのめになべてしくうち思ひて、子ども迎へて見などするをいみじきことにして、さばかりなりにし身の果て、幸福・幸ひもなげにて隠れゐたる、いみじくまかまがしきことなり」。魂が活発に動き回る世界であれば死者が蘇ることもあるわけだが、『夜の寢覚』はそうではないがゆえに不自

然にみえるのであろう。『夜の寢覚』巻四では女君の生き霊が噂されるけれども、偽物でしかない^①。『夜の寢覚』において魂の動きは決して活発ではないようである。『風葉集』巻一四によれば中間欠巻部分では女君が男君の夢に現れて「物思ふにあくがれいでて憂き身には添ふたましひもなくなきぞ経る」と歌を詠むらしいが（『王朝物語秀歌選』岩波文庫）、「物思ふにあくがれいでて」という熱中の後に残されるのは「たましひ」を失った不活発で鈍重な身体である。

注

(1) 『夜の寢覚』（新古典全集）に研究文献一覧があるが、『夜の寢覚』の心理主義を的確に分析したものは少ないようである。その点では永井和子「「ねざめ」の構造」（『寢覚物語の研究』笠間書院、一九六八年）、野口元大「『夜の寢覚』の主題と構造」（『文学』一九六七年四月・五月号）が参考になる。研究史については足立繭子「夜の寢覚」（『日本古典文学研究史大事典』前掲）が詳しい。神田龍身「『夜の寢覚』論」（『文芸と批評』五の七、一九八二年）は『夜の寢覚』を「自閉者のモノローグ」として捉えているが、本稿は抑鬱的なスタイルとコミュニケーションを強調するものである。『夜の寢覚』の抑鬱的な文章は話型論の限界を明らかにしているといつてよい。

(2) 音楽は王権にとっては外部のものであり、王権とは異質なものといえる。『うつほ物語』は王権にとって外部の存在を三つ例示しているが、それは学問（儒教）であり仏教であり音楽である。この点については拙稿「うつほ物語と三宝絵―知の基盤」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』一一、二〇〇三年）を参照されたい。

(3) 高橋文二『王朝まどろみ論』（笠間書院、一九九五年）は平安朝文学における「まどろみ」の重要性を論じている。しかし重要なのは無時間的な微睡みというよりも、覚醒という出来事ではないか。

(4) 木村敏『時間と自己』（中公新書、一九八二年）に倣っていえば、祭の後の抑鬱である。なお津島佑子『夜の光に追われて』（講談社、一九八六年）は『夜の寢覚』を踏まえた小説だが、そこにも鬱屈した状況が描かれている。子供を見失った母親の鬱屈とは作品の届け先を見出しえない作家のそれでもある（さらにいえば、それは高名な作家の娘であるがゆえの鬱屈かもしれない）。

(5) ジュリア・クリステヴァ『黒い太陽』（西川直子訳、せりか書房、一九九四年）は女性の抑鬱の様々な形の一つとして「処女なる母」を挙げている。なお、同書に引用されているネルヴァルの詩の一節「私の琵琶には憂鬱の黒い太陽が刻まれた」は寢覚の君にこそふさわしい。

(6) 宮下雅恵「病と孕み、隠蔽と疎外」（『日本文学』二〇〇一年五月号）は『夜の寢覚』の妊娠について論じているが、性差による認識の相違を問題にしており、本稿のような指摘はみられない。なお女性の文学におけるゴシック的怪奇的要素の意味については、エレン・モアズ『女性と文学』（青山誠子訳、研究社、一九七八年）やエレイン・シウォールター『姉妹の選択』（佐藤宏子訳、みすず書房、一九九六年）などを参照。

(7) 平安後期物語は「乳」に拘泥しているが、出産不安の反映ではないだろうか。『浜松中納言』巻一に「さるべき人の乳あゆるなど求めて」とあり（八九頁）、巻二の冒頭部分に「道のほど、乳参らざらむかはりに、この薬をくくめたてまつれ」とある（一二六頁）。『夜の寢覚』巻一では女君について「おのづからとれて見ゆる御乳の気色」と記され（五三頁）、『狭衣物語』巻二では女二宮について「御乳の例ならず黒う見ゆる」と記されている（一九七頁）。懐妊した飛鳥井女君は「子生むには、土公といふもの、必ず出で来かし。大忌の方にてさへあるよ」と乳母から外出を強要されるが、そこで煽り立てられているのは出産不安である（巻一・一二九頁）。

(8) 『扶桑略記』治安三年十月一九日条によれば、菅原孝標は道真の書跡のある吉野龍門寺の扉に「仮手之文」を書き付けたが、道長に抹消されたという（国史大系一二）。その前年、孝標は書家として名高い藤原行成の女が書いた「とりべ山」という歌を書の手本として娘に与えている。しかし孝標女が学んでしまったのは、書の美しさというよりも書の不吉な内容のほうであろう。孝標女のみわりに次々と死が襲ってくるからである。書き留めたいと思ったものが消去され、遠ざけたいものか成就してしまう。そうしたすれ違いこそ欲望と文字の関係であろう。

(9) 『狭衣物語』巻三には「いと堪へがたくて、くねくねしうわびしき目を見つつ長らふるよりは、かくこそあるべかりけれと思されて、この御猫、しばし預けさせたまへかし」とある（一三八頁）。この場合は、猫に夢中になることで「くねくねし」き結婚生活から逃れようとするのである。

(10) 同様の表現は女君の兄に関しても「……と語り続けるを聞きたまふに、目も口も一つになる心地して、爪弾きを

はたはたとして…」とみられた(巻二・一七五頁)。関白父子はともに同じ反応を示しているわけである。『苔の衣』(古典文庫)はその冒頭から『夜の寝覚』の影響を強く受けているが、表現も「めもくちもひとつに成たる心地して、ただそのことと打ころしつばかりのたまへば…」と学んでいる(巻二)。

(11) 関根慶子「『寝覚』の生霊をめぐって」(『平安文学研究』二九、一九六二年)を参照。身体から魂が分離し「心のほかの心」を露わにするところは、分離不安という点で出産恐怖に通じるものがある。さらにいえば、「世に苦しかるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ」と考える男君の不安にも通じている(巻四・三九六頁)。

3 『狭衣物語』と仏教——引用の鬱屈

『狭衣物語』は書名の通り衣の物語といえる。あやうく身につけそうになった「天の羽衣」から始まって「紫の身のしろ衣」「さ夜衣」「濡れ衣」「苔のさむしろ」「片敷きに重ねし衣」、さらには華麗な修辭、華麗な引歌など様々なレヴェルで衣をまとうのが『狭衣物語』だからである。冒頭で主人公は「いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人はなし」という歌を詠んでいるが、『狭衣物語』は華麗な引用なしには「心の中」を提示できないのである。

『狭衣物語』に異本が多いのも様々な衣をまとった結果であるかにみえる(以下、原文引用の際は二つの本文を併記するが、新古典全集は巻三まで深川本、巻四は平出本を底本とし、古典集成は流布本系を底本としている)。「狭衣物語」における仏典の引用もまた華麗な衣の一つといえるだろう。巻一から順番にみていきたい。

世の中の人も、うち見たてまつる際は、あやう、この世のものとも思ひきこえさせたらず、これやこの末のために現れさせたまへる第十六我釈迦牟尼仏とて、押し擦り、涙をこぼすも多かり。(新古典全集、巻一・二三頁)

「第十六我が釈迦牟尼仏と、この世の光のためと、げに顕はれたまへる」と、かたじけなくあやふきものに思ひきこえさせたまひて、雨風の荒きにも、月の光のさやかなるにもあたりたまふを、痛はしくゆゆしきものに思ひきこえたまひつつ、覆ふばかりの袖のいとまなげに、あまりこちたき御心ざしどもを、大人びたまふままに、あまり苦しくおぼす折々もあるべし。古典集成、一四頁]

『法華經』「化城喻品」に拠って主人公の美質を強調した表現だが、狭衣大将は『法華經』という華麗な衣裳をまとっている。しかも親の過保護があつて息苦しいほどの厚着なのである。

いかなるにか、この世はかりそめに、「世界不牢固」とのみ思さるるぞ、げに、世の人の言ぐさに思ひきこえさせたるやうに、いかにも変化の現れたまへるにや。人よりはものすさまじげに、口惜しき方も思ひきこえさせたまへる人もあるべし。

(卷一・二四頁)

『法華經』「隨喜功德品」の偈の一節で、「世ハ皆、牢固ナラザルコト水ノ沫・泡・焰ノ如シ」と続く(引用は岩波文庫による)。主人公は仏教に関心を持ち、「世の男のやうに、おしなべて乱りがはしくあはあはしき御心さへぞなかりける」という。しかし、仏典は主人公の行動を決定的に規制するものではない。

梵網經にかや、「一見於女人」といふことを思し出づれば、御車の簾うち下ろしたまへれど、側の広き開きたるは、え立てたまはざるべし。さだに、いかでかおはせざらん。男といふものは、あやしきだに、身のほど知らず、あらぬ思ひを付くるものとかや。

(卷一・二五頁)

「いかなる折にか、梵網經にや、「一見於女人」とのたまへるとおぼし出づれば、車の簾うち下ろしつれど、そばの広きあきたるは、えたてたまはぬなめりかし。さだには、いかでかおはせざらむ。男といふものはあやしきだに、身の程も知らず人に心をつくるわざなめりかし。一六頁」

里村紹巴『さごろも下紐』(続群書類従一八下)によれば「一たび女人ヲ見レバ能ク眼ノ功德ヲ失フ」の句というが(現存の『梵網經』にはない)、ここでは仏典が主人公を異性へと誘惑する働きをしている。『狭衣物語』において仏典は主人公の深遠な認識を示すために引用されるのではない、むしろ主人公の表層を飾るために引用されるのである。「いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜の狭衣」という歌を詠んでいるが、主人公は「いろいろに重ねて」着てしまう。その一つが仏典である。

兜率天の内院かと思はましかば留らざらまし、と思ひ出で、「即往兜率天上」といふわたりをゆるらかにうち出だしつつ、押し返し「弥勒菩薩」と読み澄ましたまふ。まことにかなしくて、また兜率天の弥勒の迎へや得たまはんずらん、と聞こゆ。

(卷一・五四頁)

「身色如金山、端嚴甚微妙」とゆるるかにうちあげてよみたまへる、いみじう心細う尊きを、母宮、大臣など聞きたまひて、「なほさまざまにあまりなる有様かな。などかうしも生ひ出でけむ。また天人の迎へもこそ得たまへ」とゆゆしくおほされて：四二頁

深川本、内閣文庫本などでは「即ち兜率天上ノ弥勒菩薩ノ所ニ往ク」（「普賢菩薩勸発品」）の部分だが、流布本では「身ノ色ハ金山ノ如ク端嚴ニシテ甚ダ微妙ナルコト」（「序品」）の部分で引用されている。主人公が唱える『法華経』の文句はそれぞれの本文で異なっており、適当に入れ替え可能なものにさえみえる。

「経も高くな読みたまひそ」といみじうゆゆしと思ひきこえたまへれば、「『令百由旬内』とこそあんなれ。なでうおどろおどろしきものか参で来ん」とてうち笑ひたまへり。（卷一・五五頁）

『法華経』「陀羅尼品」の「ワレモ亦、自ラ当ニ是经ヲ持タラム者ヲ擁護リテ百由旬ノ内ニ諸ノ衰患ナカラシムベシ」の一節である。仏が擁護してくれるというが、主人公はいわばこうした引用によって守られているのである。心配する両親に対して主人公は笑って答えており、『狭衣物語』の仏教認識は「おどろおどろしきもの」に達するような深遠なものではない。

「若無比丘と、仏のせちに戒めたまへるほどこそ、思ひいたらぬ隈もありがたからめ。人も許し、我も見まくには、えこそ強からぬわざにや」とて、笑ひたまへる御顔の、近くは若うつくしげに、愛敬の我が顔にもこぼれかかるやうにおほえたまへば…（卷二・一八三頁）

「若無比丘と、仏のせちに戒めたまへるよ。げにとこそ思ひあはせらるれ」とて笑ひたまへる御顔の、近くてはいとど若くうつくしげにて、あやしげなる我が顔にも移りやすらむとおほゆる御にほひ：一四九頁

『法華経』「安樂行品」の偈の一節で「若シ比丘無クンバ、一心ニ仏ヲ念ゼヨ」と続く。女色を戒める部分だが、むしろ主人公の美貌を強調している。

思ひ続けるに、行ひも懈怠して、「我見灯明仏」と思すも心憂くて、「南無平等大慧法花経」としのびやかにのたまひつるも、なべてならず尊く聞こゆるに、人々見やりて…（卷二・二四一頁）

「思ひつづくるほどは、行ひも懈怠するは、思へばいと心憂くて、「南無平等大慧一乗妙法」と忍びやかにのた

まへる、なべてならず尊く聞こゆるに、人々… 二〇二頁〕

『法華経』「序品」の一節で「ワレ灯明仏ヲ見奉リシニ、本ノ光瑞ハカクノ如シ」と続くが、仏典は主人公の美質を装飾しているだけなのである。その意味では、『狭衣物語』にしばしばみられる朗詠と全く変わらない（巻一・九五頁、一四九頁、巻二・一九一頁、二七二頁、巻三・一〇六頁、巻四・三五七頁）。『白氏文集』の引用などもまた孤独を美化するもので、唯美的審美的だからである。

「是人命終当生忉利天上」とうちあげたまへるも、山の鳥獸といふらんものも、耳立つらむかしと尊くいみじきに、あるかぎり賤の男もうちしほれぬべきに、いとど三位中将はしほしほとうち泣きたまひけるける。

（巻二・二九七頁）

「是人命終当生忉利天上」とうちあげたまへるは、「四方の山の鳥獸も耳立つらむかし」と尊くいみじきに、三位中将物めする人にて、涙をほろほろとぞこぼしける。二四九頁〕

「コノ人ハ命終ニシテ当ニ忉利天ノ上ニ生ルベシ」というのは『法華経』「普賢菩薩勸発品」の一節である。入水した飛鳥井姫君の往生を願って経文を読誦しているところだが、ここでも仏典が主人公の美質を装飾している。とりわけその美声は何度も強調される。

「薬王汝当知 如是諸人等」と読みたまふに、深山おろしあらあらしきに吹きまがひて、我が心にも心細く悲しきことかぎりなし。「我爾時為現 清浄光明身」など、心にまかせて読みすましたまへるを、聞く人みなしみ入りて悲しくいみじきに、さばかりのあらあらしき修行者どもも涙を流したり。（中略）いといとも心澄みまさりて、うち休まんとと思されねば、やがて作札而去まで通し果てたまふに、御堂の中しめじめとして、行ひの声々もやめ、各々の所作どももうち忘れつつ聞き入りたるに、暁にもなりぬ。

（巻二・二九八頁）

「薬王汝当知如是諸人等」といふわたりを心細くうちあげつつ読みたまふに、深山風さへ荒々しく吹き迷ひつつ、我が御心のうちにも心細く悲しきこと限りなし。「我爾時為現清浄光明身」など心にまかせて読みながしたまへるに、聞くかぎりの人々、何事も聞き知らぬあやしき修行者まで涙を流したる…（中略）いとど心も澄みわたりて、うち休まむともおぼされねば、やがて「作札而去」まで通し果てたまふに、御堂の内しづしづとしてのどか

なるに、行ひの声もやめ、おのおの所作どうち忘れつつ聞き入りたるに、曉かたにもなりぬ。二四九頁」

『法華經』『法師品』の偈の一節で、「藥王ヨ、汝ハ当ニ知ルベシ、カクノ如キ諸ノ人等ニシテ…」、「ワレハソノ時、為ニ清淨ナル光明ノ身ヲ現サン」と続く。粉川寺で主人公が夜通し勤行しているところだが、主人公の美声に感応して普賢菩薩が現れるほどである。

三昧堂の方に、いみじう功入りたる声の少し唄れたるして、千手經をぞ読むなる。「菩提の因とならむ」といふところ、中にも耳とまりたまふに、宮の中将（中略）いみじくあはれがりて、「いかやうなる僧ぞ」と見せにやりたるに、「片目悪しき僧の、いみじくあはれげなるに、さぶらひけり」と申せば、呼びにやらせたまへり。

（卷二・三〇〇頁）

仏典さえ装飾として利用する『狭衣物語』はきわめて唯美的審美的な物語だが、そこに変化をもたらすのはむしろ美の欠損である。この「片目悪しき僧」を通して主人公は飛鳥井女君の生存を知ることになるからである。

「云何女身速得成仏」と、忍びやかに、わざとならずさみたまへる御けしき、いとあはれなるに、まして御袖は引き放したまはざりけり。かかる御けはひを聞きて、物言ひつる人々、「まだおはしけるものを。かかるけはひ聞きたまひつらん」とわび合ひたり。

（卷三・六四頁）

「云何女身速得成仏」などいふわたりを、いとみそかに口ずさみたまへるが、鼻声なりしも、いますこしあはれにめでたきを、声しつる人々、「いまだ出でたまはざりけるものを。聞きやしたまへらむ」と言ふ。五二頁」

「イカンゾ、女身、速ヤカニ成仏スルコトヲ得ン」は『法華經』『堤婆達多品』の偈の一節である。女人往生の一節を唱えることで女房たちの関心を誘っているのである。仏典は主人公の美質を際立てており、女房がそのことを証明している。仏典を唱える主人公を危惧するのが両親の役割で、賛美するのが女房の役割である。

「皆如金色従阿鼻獄」など、物のいみじう心細く思さるるままに、うち上げつつ読みたまふは、言ひ知らず悲しきに、寝たりつる人々も皆おどろきて、鼻うちかみつつ、仏も現れたまひし御声なれば、道季などは、「いかなる事かあらん。物心細く思したるよ」など、恐ろしうて、人々に言ひ合せけり。

（卷三・一四二頁）

「皆如金色従阿鼻獄」といふわたりを心細げに読み流したまへる、言ひ知らずかなしきに、寝たりける人もおど

ろきけるにや、ここかしこに、鼻うちかむものあり。仏だに現はれたまへりし御声なれば、人はまして忍びがたかりけり。一二八頁

『法華經』「序品」弥勒菩薩の偈の一節で、「皆金色ノ如クニシテ、阿鼻獄ヨリ上、有頂ニ至ルマデ…」と続く。主人公の美声は普賢菩薩を出現させるほどであったが、ここでも仏典は主人公の美質を際立たせている。

…など、独りごちたまひて、「及見仏功德」と読みたまへるは、日ごろ聞きつる尊さにも優れて、身にしむ心地ぞしける。
(卷三・一七三頁)

「…などひとりごちたまひて、「我所有福業今世若過世及見仏功德尽廻向仏道」とうちあげて読みたまへる、日ごろ聞きたまへるさまさまの尊さにも似ず、身にしむ心地ぞしける。一五七頁」

『法華經』「譬喻品」の偈の一節で「ワガ有スル所ノ福業ノ今世、若シクハ過世ナルト及ビ見仏ノ功德トヲ尽ク仏道ニ廻向セン」と続く。仏典引用の長さが諸本によって異なるが、すでに述べた通り、仏典が一種の装飾にほかならないことをよく示している。法華八講における僧たちの集団的な誦經とは異なる独自の誦經が主人公の孤独を美しく彩り、周囲の人々がそのことを証明する役割を担っている。

「仏の、世皆不牢固と勧めたまへるものを」とのたまへば、「まろが侍らざらん後の事は知らず、見きこえんほどばかり、かかる事なのたまひそ」
(卷三・一九四頁)

「〔「世皆不牢固とすすめたまへるものを」とのたまふを、「まろが侍らずなりなむのちのことは知らず、見たてまつらむほどばかり、かかることなたはぶれにてもものたまひそ」一七五頁〕

再び『法華經』「隨喜功德品」の偈の一節だが、仏典を介して主人公と両親の関係が浮かび上がってくる。両親の存在は主人公が仏教の深みにはまることを抑え、たえず表層に留めておく役割を担っているのである。

なほ、げに劫濁乱の時は、諸仏以方便もかひなくもありけるかなと、返す返す、悲しうも恥づかしうも、思し知られけり。
(卷四・二二二頁)

「なほ「げに劫濁乱時諸仏方便もかひなくありけるかな」と、返す返すもかなしくも恥づかしくもおぼし知られけり。一九二頁」

『法華經』「方便品」の一節「劫ノ濁乱ノ時ニハ、衆生ハ垢重ク、慳貪・嫉妬ニシテ、諸ノ不善根ヲ成就スルガ故ニ、諸仏ハ方便力ヲモッテ…」に拠った表現である。ここでも仏典を介して親子関係が浮かび上がってくる。親は子が遠ざかることにとまどい、子は親から遠ざかることにとまどうのだが、そのことを浮かび上がらせるのが仏典だからである。仏教は抑鬱的なディレンマをもたらすのである。

「…昔よりして、今日今にも、この方様につけては、生きながら仏になりぬべかりけるものを。見たてまつり初めしよりこそは、この世を捨てがたいものと思ひなりにしか。あはれに味気ないことなりや。かかればこそ、仏も『止々不須説』とのたまひけれ」とてぞ、涙ぐませたまひぬる。
(卷四・三八七頁)

「…昔よりして、今日今にも、この方様につけては、生きながら仏になりぬべかりけるものを。見たてまつり初めしよりこそは、この世捨てがたきものと思ひなりにしか。あはれにあぢきなきことなりや。かかればこそは、仏も止止不須説とのたまひけれ」とてぞ、涙ぐませたまひぬる。三五二頁」

同じく「方便品」の一節「止ミナン、止ミナン、説クベカラズ、ワガ法ハ妙ニシテ思ヒ難シ」に拠った表現である。出家するべきであつたが、恋のためにできなくなつてしまつたという。そのことをうまく説明できないので仏典を引用しているのだが、ここにみられるのも仏典の審美的な利用であらう。出家へのためらい、そこで営まれるのはもっぱら審美的生活である。その意味で、美とは仏教の深みにはまることを阻止する一つの方策であつた。主人公の出家を阻止したのは賀茂明神などではなく、こうした審美的な生活だといふべきかもしれない。

しかしながら、審美的生活は空虚なものでしかないだろう。結ばれることのない狭衣大将と源氏宮の関係が示すように、実質を欠いているのが審美的生活だからである。そして審美的生活の空虚さは齋院生活の空虚さでもある。齋院生活こそ男と女が露わに結ばれることのない生活だからである。そこで実践されていたのは、いわば不毛の美学である。巻三では「かつ見るもあるはあるにもあらぬ身を人は人と思ひなすらん」という歌を詠んでいるが(一三九頁)、そうした空虚な身体が狭衣大将の身体にはかならない。

ところで、『無名草子』は『狭衣物語』の欠点を次のように記していた。

大将の笛の音めでて、天人の天降りたること。

粉河にて普賢のあらはれ給へる。

源氏の宮の御もと、賀茂大明神の、御懸想文つかはしたること。夢はさのみこそ、と言ふなるに、余りに嚴重なり。

齋院の御神殿鳴りたること。

何事よりも何事よりも、大将の、帝になられたること。返す返す見苦しく浅ましきことなり。めでたき才・才覚すぐれたる人、世にあれど、大地六反震動することやはあるべき。いと恐ろしくまことしからぬこともなり。

(六一頁)

「さらでもありぬべきことども」として列挙しているのだが、こうした超自然現象によつてもはや熱狂がもたらされないこと、かえつて空々しく虚しいことを『無名草子』作者はよく知っている（ただし後の御伽草子では、こうした超自然的な要素が多用されることになる）。『無名草子』は別のところで「など、源氏とてさばかりめでたきものに、この経の文句の一偈一句おはせざるらん」と『源氏物語』に不満を表していた。仏典を引用する点で『狭衣物語』のほうが優っているかにみえるが、しかし、それはもっぱら装飾的な引用にとどまっている。しかも、それは抑鬱的な効果しか生まないのである。華麗な装飾とみえたものがきわめて抑鬱的なものに転じてしまう。それは豪華で華麗な織物かもしれないが、そもそも虚しいのである。平安後期物語のマニエリスムの側面といつてもよい。

狭衣大将は源氏宮に向かつて「かくばかり思ひ焦がれて年経やと室の八島の煙にも問へ」と恋心を告白している（巻一・六〇頁）。しかし、その「煙」は冷え切っているのではないだろうか。巻二の雪山を作る場面で狭衣大将は「燃えわたる我が身ぞ富士の山よただ雪にも消えず煙たちつつ」と歌を詠んでいるが（二四一頁）、その「富士の山」は雪で作られた人工物でしかないからである。「燃えわたる我が身」は実は冷え切っている。「煙」は冷たい雪山から立ち上るものでしかなく、情熱の炎も実は冷えきっているのである。冷たいのは、その場面に限らない。高野・粉河詣での場面もみてみよう。

水際いたく凍りて、浅瀬は舟も行きやらず、棹さしわたるを見たまひて、

吉野川浅瀬白波たどりわび渡らぬ仲となりにしものを

思しよそふる事やあらん。妹背山のわたりは見やらるるに、なほ過ぎがたきに御心を汲むにや、舟いでえ漕ぎやらず。

わきかへり氷の下にむせびつつさもわびさする吉野川かな

(巻二・二九六頁)

凍りついて「渡らぬ仲」となったのが狭衣大将と源氏宮の関係なのである。凍りつき身動きできない。それに対して、「流れても逢ふ瀬ありや」の歌を詠み入水する飛鳥井女君は「流れ」を体現しているといえる。『狭衣物語』の抑鬱的な状況に速度と変化を与えるのが飛鳥井女君の役割であろう(女車の速さが登場のきっかけとなっていた)。その挿話は御伽草子にもっとも近い。飛鳥井女君の死は竜女成仏としても読めるからである。

では、道化的な今姫君の役割は何か。今姫君の母代は「吉野川何かは渡る妹背山人だのめなる名のみ流れて」と早口に詠んでいるが(巻一・一〇九頁)、それは「名のみ」の空転した「流れ」である。源氏宮のように不動でも、飛鳥井女君のように流転するのではない。ただひたすら空転する。そのため狭衣大将は「吉野川渡るよりまた渡れとやかへすがへすもなほ渡れとや」と強制される(巻三・四二頁)。今姫君はきわめて狂騒的だが、抑鬱を払い除けようとしているかのようだ。「人々あまたありける限り重なりて、衣の裾おのおの踏みつつ、すぎすぎに倒れ伏したるは、彈碁の馬の心地したりける」「流布本は「牧の馬の心地」というところなどスラップスティクにはかならない(巻三・四〇頁)。華麗な引用の物語にふさわしい重ね過ぎのドタバタである。巻三では「いとどはやされて」とあるように、母代と今姫君の掛け合いが狂騒性を増している。

結ばれることのない狭衣大将と源氏宮の関係はいうまでもなく、狭衣大将と一品宮の関係にしても、狭衣大将と式部卿宮の姫君の関係にしても奇妙なものである。狭衣大将が年上の一品宮のもとに通うのは、そこに飛鳥井女君の遺児がいるからでしかないし、狭衣大将が式部卿宮の姫君と結婚するのは、その姫君が源氏宮に似ているからでしかない(「ふと思ひ出でられさせたまふ片つかたは、まづ胸ふたがりたまひて」巻四・三五九頁)。つまり、本来の情熱の対象は別のところにあつて、熱すれば熱するほど冷えていく関係がそこにはある。

冷たさは平安後期物語のマニエリスム的な側面を表しているが(『浜松中納言』で吉野の姫君は「吉野の山の雪に

ならひて」と詠み、『夜の寢覺』の女君は「雪降る里はなほぞ恋しき」と詠む）、それは読者と作品の関係にもみられる。平安後期物語の読者もまた熱すれば熱するほど冷えていくからである。『三宝絵』や『枕草子』には物語に熱中する女子供の姿が描かれていたが、それらと違って鬱屈した平安後期物語の読者はもはや單純に熱狂することができない。「少年の春とうちはじめたるより、言葉遣ひ何となく艶に、いみじく上衆めかしくなどあれど、さしてそのふしと取り立てて心にしむばかりの所などは、いと見えず」と語る『無名草子』はひどく冷静である（『明月記』貞永二年三月二〇日条に「於歌者拔群、他事雖不可然」と記す定家も同様であろう）。狭衣大将は「過ぎぬるかた悔しき御宿世」〔流布本では「御癖」〕の持ち主だが（卷三・一三三頁）、『狭衣物語』の読者が熱心に読み耽っていたのは狭衣大将の姿などではなく、「後悔」の姿そのものなのかもしれない。

ありし天稚御子に後れたまひけん悔しさも、このごろぞ思ひ出でたまふ。ありしやうにて試みましとも、おぼえたまふ。

（卷三・一一四頁）

一品宮と虚しい生活を送る狭衣大将が、結婚を後悔しているところである。音楽に魅せられた天人が現れ狭衣大将を連れ去ろうとする場面が卷一にあったが、そのときの陶酔が忘れたいのであろう。『狭衣物語』のいたるところに後悔を見出すことができるのであり、『狭衣物語』の主人公は「後悔」であるとさえいえる。内閣文庫本『狭衣物語』（古典大系）の末尾には「男も女も、心深きことは、この物語に待るとぞ本に」とあるが、「心深き」とはそのように鬱屈した状態のことであろう。

ここで六条斎院の母親が出産の際に亡くなっていた点を想起するならば、『狭衣物語』はあらかじめ喪失を抱えていたといえる。『狭衣物語』の後悔に根源があるとすれば、その点であろう。華麗な修辭とみえたものも、必死の方法であったことになる。誕生と同時の死去、生と同時の死。何ら支えがないがゆえに引用を積み重ねるほかないというのが『狭衣物語』の方法だったのである。『狭衣物語』において出産は心的外傷として遠ざける必要があったはずである。

六条斎院宣旨が作った物語としては『玉藻に遊ぶ権大納言』と『狭衣物語』が知られている。両者に共通するのは冒頭の構造である。『玉藻』はすでに散逸しているけれども、『無名草子』によれば「親はありくとさいなめど」と

始まるという。催馬楽を踏まえつつ逆接で始まっているわけだが、親に叱られるとは抑鬱的な事態であろう。『狭衣物語』は朗詠（白楽天の漢詩）を踏まえつつ「少年の春惜しめども」と逆接で始まっている。時間を惜しむことも抑鬱的な事態でありうる。いずれも巧みに先行する語句を踏まえつつ、抑鬱的な事態を逆接で受けるところから始まるのである。しかも、それはいつその抑鬱の昂進をもたらししている（「少年の春惜しめども留らぬものなりければ……」）。『天喜四年閏三月六条齋院祿子内親王歌合』で宣旨の詠んだ歌「惜しむにもとまらぬものと知りながら心砕くは春の暮かな」との類似が指摘されているが（古典全書解説）、「惜しむにもとまらぬものと知りながら心砕く」のが『狭衣物語』の主人公なのである。

以上、『浜松中納言』における建築の抑鬱的な同一性、『夜の寝覚』における天上の音楽以後の抑鬱的な状況、『狭衣物語』における仏教の抑鬱的な利用といったものをみてきたが、歴史的所産として抑鬱的状况の出現を指摘できるのではないだろうか。それこそが平安後期物語の鬱屈した新しさである。

注

(1) 豊島秀範「へ衣」の系譜」（『物語史の研究』おうふう、一九九四年）が「衣」を題名とする物語に着目している。『狭衣物語』の仏典引用については、小峯和明「狭衣物語と法華経」（『国文学研究資料館紀要』一三、一九八七年）があり、示唆に富む。しかし、本稿は仏典引用がもたらす抑鬱的状况を明らかにしようとするものである。異同を問題にする点で引用論と諸本論は相互変換可能なのだが、そうした引用論Ⅱ諸本論そのものの鬱屈も明らかになるだろう（研究のマニエリスムの段階といってもよい）。なお研究史については野村倫子「研究の現在と展望」（『狭衣物語の視界』新典社、一九九四年）や後藤康文「狭衣物語」（『日本古典文学研究史大事典』前掲）が詳しく、最近の研究としては倉田実『狭衣の恋』（翰林書房、一九九九年）、諸家による『論叢狭衣物語』一～四（新典社、二〇〇〇年～二〇〇四年）、『狭衣物語の新研究』（新典社、二〇〇三年）などがある。

(2) 『狭衣物語』の主題体系は火と高さに向かうもの、水と深さに向かうものに分けて考えることができるだろう。前者は源氏宮の挿話であり、そこでは「煙」や「月」が歌に詠まれる。女二宮の挿話もそれに近い。巻四の末尾で狭

衣大将は女二宮に向かつて「消えはてて屍は灰になりぬとも恋の煙はたちもはなれじ」という歌を詠んでいるからである（四〇九頁）。それに対して後者は飛鳥井女君の挿話であり、そこでは「水」や「底」が歌に詠まれる。巻四で飛鳥井女君の絵日記が発見されるが、「消えはてて煙は空にかすむとも雲のけしきを我と知らじな」という女君の歌は自らが火と高さの主題とは無縁であることを告げている（四〇〇頁）。

（3）『金葉集』に「竜女成仏」を詠んだ「わたつ海の底のもくづと見し物をいかでか空の月と成らん」という歌があるが、その表現論理に従えば、「早き瀬の底の水屑」となった飛鳥井女君も竜女になりうるといえる。

（4）石川徹「解説」（古典全書『狭衣物語』上、朝日新聞社、一九六五年）は「悔恨の物語」と呼び、関根賢司「狭衣物語の世界」（『物語文学論』桜楓社、一九八〇年）は狭衣大将を「後悔しき大将」にたとえている。

（5）『浜松中納言』『夜の寝覚』と『狭衣物語』に相違があるとすれば、前者のほうが懷妊・出産のテーマにおいてより直接的だという点が挙げられる。女二宮は「寝覚めたる人」と呼ばれているので『夜の寝覚』の女君を想起させるが（しかも「冬の夜のつがはぬ鴛鴦の浮き寝」の冷たさを共有している、巻二・二三三頁）、『狭衣物語』の特徴は、女二宮の出産を母親のことにして隠蔽してしまうような華麗なカモフラージュにあるだろう。女二宮の身体については土井達子「『狭衣物語』女二宮の身体をめぐる」（『岡大國文論稿』二九、二〇〇一年）が論じている。

（6）萩野敦子「『狭衣物語』の発端」（『国語国文学研究』九四、一九九三年）が発端における憂愁の構造を論じている。なお『風葉集』巻一二によれば、『玉藻に遊ぶ権中納言』の主人公は「越えて後静心なき逢坂をなかなか関のこなたなりせば」という歌を詠むらしいが、そこには「越えて後」の鬱屈を指摘できる。

三 『更級日記』と物語の精神

1 神か仏か

物語を見失った後、代わりに個人の魂を救ってくれるものは何であろうか。それが宗教ということになる。しかし『更級日記』の場合、神か仏か揺れていた。

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎりは、これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ、皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむ造る」と言ふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言ふと見て：

(三七頁)

「六角堂」は仏寺のようだが、夢の中では天照御神への信仰を命じられている。それは神なのか仏なのか。

ものはかなき心にも、つねに、「天照御神を念じ申せ」と言ふ人あり。いづこにおはします神仏にかはなど、さは言へど、やうやう思ひわかれて、人に問へば、「神におはします。伊勢におはします。紀伊の国に、紀の国造と申すはこの御神なり。さては内侍所にすくう神となむおはします」と言ふ。伊勢の国までは、思ひかくべきにもあらざなり、内侍所にも、いかでかは参り拝みたてまつらむ、空の光を念じ申すべきにこそはなど、浮きておぼゆ。

(六五頁)

孝標女には天照御神が神か仏かわからない。人に尋ねてようやく神であることが判明するが、祈る手立てではない。ただ「空の光」を念じるばかりである。『更級日記』において天照御神は「光」の明るさに通じているようである。「内裏の御供に参りたるをり、有明の月いと明かきに、わが念じ申す天照御神は内裏にぞおはしますなるかし、かかるをりに参りて拝みたてまつらむと思ひて、四月ばかりの月の明かきに、いと忍びて参りたれば……」(七六頁)。これは内裏に参上した際に垣間見るところだが、「月」の明るさと「内裏」の華やかさが天照御神を特徴づけているのである。次に夢解きの場面をみてみよう。

年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢解きもあはせしかども、そのことは一つ叶はでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。

(一〇八頁)

「天照御神を念じたてまつれ」と命じられた夢が説明されているが、そうすれば乳母として内裏に出仕し「みかど后」の庇護を受けるはずだったという(「乳母」こそ最高の出世だったのである)。「天照御神」は天上への憧憬に通じており、物語の世界に近づくことでもあっただろう。しかし、夢はかなえられることなく鬱屈が生じている。それが、あの打ちひしがれた「鏡」の姿である。「功德も作らずなどしてただよふ」逡巡が孝標女には付きまとい

る。

ここから、『更級日記』という書名について考えてみるができるだろう。夫の死後、甥が訪ねて来たとき、孝標女は次のような歌を詠んでいる。

月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ

(一一〇頁)

いうまでもなく『古今集』の「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」(雑上、読人しらず)を踏まえているが、この歌は「月」も出ていない。ここにあるのは物語への熱狂から醒め夢を果たせず夫を失った女の鬱屈した闇であろう。光源氏の「光」からもっとも遠い世界といってよい。母なるものを捨てた「姨捨」、その月の光からも見捨てられている様子がこの歌を通して読み取れるのである。『更級日記』という書名は、逆説的に鬱屈した闇を示しているように思われる。自らを生み出したものを捨てる、あるいは自らが生み出したものに捨てられるといった抑鬱的な事態がそこには貼り付いている。

「姨捨」の表現が『浜松中納言』にみられ(三六〇頁)、『夜の寝覚』にみられ(四二頁、二〇五頁、四二三頁、五四〇頁)、『狭衣物語』にみられるのも(巻一・七二頁)、鬱屈と無縁ではないだろう(『栄花物語』巻三六、『とりかへばや』巻四にもみえる)。この時代の流行語といってもよい。特に注目されるのは『夜の寝覚』巻五、末尾の贈答歌である。「かきくらし昔を恋ひし月影に我中空に泣く泣くぞ来し／なかなかに見るにつけても身の憂さの思ひ知られし夜半の月影」。男君と女君の贈答歌は姨捨山伝説をなぞるものになっている。末尾欠巻部分で女君が詠む歌「知らざりし山辺の月を独り見て世に亡き身と思ひ出づらん」(『風葉集』巻一七)も姨捨伝説を連想させる(見捨てられたかぐや姫とは姨捨そのものである)。

2 逡巡の消滅

『更級日記』には冒頭から救済の可能性として仏教が存在していた。しかし、そこにも熱狂と鬱屈のテーマを見て取ることができる。

年ごろあそび馴れつる所を、あらはにこほち散らして、たちさわぎて、日の入り際のいとすぐく霧りわたりたる

に、車に乗るとてうち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。
(一四頁)

東国から京に向けて出発する場面である。長年遊び馴れた所が壊されているところからは熱狂の喪失が読み取れるし、祈願の対象を見捨てしまふところからは鬱屈した悲しみが読み取れるだろう（「霧」が閉塞を際立たせている）。また孝標女は旅の途中、関寺でも仏像を見捨てるかのような思いに囚われている。

山づらにかりそめなる切懸といふものしたる上より、丈六の仏の、いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに、人はなれていづこともなくておはする仏かなと、うち見やりて過ぎぬ。
(三〇頁)

もっぱら仏像の顔に視線が向かうのは遮蔽物があるからだ、顔が情動を表出する部分だからでもある。仏像が人里離れたところにあることを気にせずにはられない孝標女は、作品冒頭における仏像との痛切な離別を反復しているのである。ところで、なぜ未完成の仏像に惹きつけられるのか。次の挿話がそれを説明してくれる。

夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは、前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素性まさりて人と生れたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、その造りたりしなり。箔をおしさして亡くなりしぞ」と。
(七二頁)

清水寺の僧によれば、孝標女は前世において仏師であったが、仏像が未完成のまま亡くなったという。仏師としての孝標女、この概念は重要であろう。なぜなら、そう思い込まされた結果、孝標女自身の行動を規制する原理となるからである。「いと多く造りたてまつりし」と語られる多作、「こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と語られる他者による補作、「ねむごろに参りつかうまつらましかば……おのづからようもやあらまし」という後悔と鬱屈、これらはそのまま孝標女の作家活動を示すものではないだろうか（『浜松中納言』で主人公が唐后と結ばれる家も「造りさしたるけしき」であった）。

石山詣の際、関寺に立ち寄った孝標女は再び「荒造りの御顔」を思い出している（八七頁）。「箔」が貼られたとき未完成の仏像は完成するわけだが、「天喜三年十月十三日」の阿弥陀仏の夢はそれに相当するといえる。

天喜三年十月十三日の夜の夢に、居たる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず。

霧ひとへ隔たれるやうに透きて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手、片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方には印を作りたまひたるを、こと人の目には見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくけおそろしければ、簾のもと近くよりもえ見たてまつらねば、仏、「さは、このたびは歸りて、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人にはえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

(一〇八頁)

ここには強烈な視覚性がうかがえるが（未完成の「箔」が完成したかのように）、「さすがにいみじくけおそろしければ」という逡巡もみられる。「さは、このたびは歸りて、のちに迎へに来む」という阿弥陀仏の声は期待を抱かせるが、しかしその期待が本当に叶うのかどうか鬱屈を生じさせるようにも思われる（救済を祈念する仏師の期待と鬱屈に等しい）。

「天照御神」の夢が裏切られた後、孝標女にとってはこの「阿弥陀仏」が唯一の頼みとなる。いずれも光に満ちていたけれども神か仏かによりやく結論が出たわけだが、『更級日記』はその逡巡の行程だったといえる。もつとも、それにすがつての救済も容易ではないだろう。「世のつねの宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら」というのが『更級日記』の最終歌だが、「そむきはてたる」身の上も決して安定したものではないからである。

齋院を退下してから出家した選子内親王の例が示すように、神と仏は対立したまま容易には一致がたいものであったと思われる。³⁾『拾遺集』巻二〇には「業尽す御手洗河の亀なれば法の浮木に逢はぬなりけり」という選子の歌が収められているが、齋院は「法の浮木」に出会うことができないのである（『発心和歌集』序文にみえる「定有誹謗者」という弁解も選子の困難な立場を示しているかのようだ）。『詞花集』巻一〇にも「思へども忌むとていはぬことなればそなたにむきて音をのみぞ泣く」という選子の歌が収められている。『夜の寝覚』は齋宮について「浅くはあらざりけむ御罪」と記し（巻四・四一三頁）、『狭衣物語』は齋院について「ただ仏の御方さまを背きたまへるのみぞ、後の世のため口惜しきことに侍る」と語っている（巻四・二二九頁）。狭衣大将の出家を阻止したのは賀茂明神である。神と仏は容易に調和してくれそうもない。

平安朝物語文学とは神仏対立から神仏習合への過渡期の産物といえるだろう。『無名草子』には『源氏物語』が大斎院選子の依頼によって書かれたとする説がみえるが、神と仏の間を埋めてくれるのが物語文学であったのかもしれない。そこにあるのは中世的な神仏習合思想によってあつさり⁽⁴⁾と救済される世界ではない。神か仏か逡巡する世界であり、焦点が定まらず鬱屈する世界である。そんな世界にあつて文学は救済の手段となるのではない。むしろ救済を遅延させる装置として機能していたのである。その意味で、『狭衣物語』結末の「天照神」の出現はあまりに唐突で、逡巡を消し去り物語に終止符を打ってしまったようにみえる。だからこそ、『無名草子』は『狭衣物語』に抗議していたのではないか（とはいえ『狭衣物語』最終歌が示すように、狭衣大将はいつまでも女の住む「霧の籬」に立ち尽くす）。

『今物語』などにみられる紫式部墮地獄説話は、そうした逡巡の消滅をよく示している。

ある人の夢に、その正体もなきもの、影のやうなるが見えけるを、「あれは何人ぞ」と尋ねければ、「紫式部なり。そらことをのみ多くし集めて、人の心をまどはすゆゑに、地獄におちて苦を受くる事、いとたへがたし。源氏の物語の名を具して、なもあみだ仏といふ歌を、巻ごとに人々に詠ませて、我が苦しみをとぶらひ給へ」と言ひければ、「いかやうに詠むべきにか」と尋ねけるに、

きりつばに迷はん闇も晴るばかりなもあみだ仏と常にいはなん

とぞ言ひける。

（『今物語』三八、引用は講談社学術文庫による）

物語は「人の心をまどはす」ものであり、作者は「地獄におちて苦を受くる事」になる。だから仏教によって救済されなければならない。それが仏教優位の中世的な思考であろう。だが、かつて物語はそれほど単純に規定されてはいなかったのである。大斎院選子の執筆依頼説は『河海抄』にもみえる。

大斎院より上東門院へめつらかなる草子や侍ると尋申させ給けるにうつほ竹とりの古物かたりはめなれたれはあたらしくつくりいたしてたてまつるへきよし式部におほせられければ石山寺に通夜してこの事のり申けるにおりしも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるままに物かたりの風情空にうかひけるをわすれぬさきにとて仏前にありける大般若の料紙を本尊に申うけてまつすまあかしの両巻をかきはしめけり

(『河海抄』料簡、引用は『紫明抄 河海抄』角川書店による)

執筆を依頼された紫式部は石山寺に参籠し、「大般若の料紙」に須磨・明石両卷から書き始めたという。『狭衣物語』末尾で主人公は飛鳥井姫君の絵日記を漉き返し経を書写し供養していたが(「皆細々となして、経紙に加へて漉かせさせたまひて、金泥の涅槃経、御手づから書かせたまひけり」)、それと符号するだろう。いささか図式的に言えば、神の領域から要請された物語がいつの間にか仏の領域に移動させられているのである。ここではすでに神か仏かといった逡巡が消滅している⁽⁶⁾。

『礼記』月令には「季春之月：生氣方盛、陽氣发泄」とあるが(全釈漢文大系)、そうした万物を成長させる自然の気が平安後期物語には乏しい。『江家次第』二には「作御生氣方獸形、令合卯杖、生氣在離作馬：生氣在巽作龍」(神道大系)、『曾我物語』卷五には「蛇はわだかまれど、生氣の方にむき」(古典大系)とあって、馬や蛇は生氣に満ちたものとされるが、物語文学はそれらを回避し「生氣の方」を向いていない。生氣に満ちたものを扱っているのは、軍記や説話のほうである。『徒然草』一七二段には「老いぬる人は、精神おとろへ、淡くおろそかにして、感じ動く所なし」とみえるが(古典集成)、物語文学の精神は確実に衰弱する方向に向かっている。

『堤中納言物語』所収の『虫めづる姫君』には熱狂と鬱屈の鮮明な対比を見て取ることができるように思われる。「蝶めづる姫君の住みたまふかはらに、按察使の大納言の御むすめ、心にくくなべてならぬさまに、親たちかしづきたまふこと限りなし。この姫君ののたまふこと、「人々の、花、蝶やとめづること、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて、よろづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、「これが、成らむさまを見む」とて、さまざまなる籠箱どもに入れさせたまふ」。つまり蝶めづる姫君とは熱狂の一面であり、虫めづる姫君とは鬱屈の一面なのである。鬱屈の一面としては毛虫の黒がふさわしいだろう。同じく『堤中納言物語』所収の『はいずみ』には「白き物をつくると思ひたれば、取りたがへて、掃墨入りたる畳紙を取り出でて、鏡も見ず、うちさうぞき…」とみえる。短編であれば容易に拭い落とせるかもしれないが、長篇となつた平安後期物語には陰鬱さがどうしようもなく貼り付いている。

もちろん、そうした鬱屈の背後には当時の時代状況というものがあつたはずである。『更級日記』には「世の中い

みじうさわがしうて、まつさとの渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ」と記されている(三三頁)。疫病の流行があり、乳母が亡くなり、物語への興味も鈍っていく。災害によってもたらされた抑鬱である。「かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく」とあるように、そうした抑鬱を払うためにもたらされたのが物語だが(『狭衣物語』の場合は主人公を帝位につけることで一気に災害の抑鬱を払おうとする)、すでに見た通り、その物語がさらに抑鬱を昂進させたのである。『更級日記』の主題については物語から信仰へと単線的に理解されることが多いが、必ずしもそうではない。揺り戻しがあり、抑鬱のいつその昂進があるといえる。

注

(1) 『土佐日記』に鏡を供物とする場面があったが(拙稿「土佐日記論」『新しい作品論へ、新しい教材論へ』古典編二、右文書院、二〇〇三年)、『更級日記』にも供物としての鏡を見出すことができる。孝標女は鏡を奉納して夢を手に入れているからである。鏡を犠牲にして貫之が和歌の世界を引き寄せるのに対して、孝標女は夢の多面性を知るのである。

(2) 天喜三年十月十三日の阿弥陀仏の夢は、天喜元年建立の平等院阿弥陀堂に触発されたものかもしれない。孝標女は永承元年の十月に頼通の宇治殿を訪れ『源氏物語』の女君に思いをはせていたが、その場所が別のものに変容してしまっただけである。また、天喜三年五月三日の六条斎院内親王物語歌合に参加できなかった代償的な夢と考えることもできる。

(3) 斎院と仏教のかかわりについては岡崎知子「大斎院選子における神と仏」(『平安朝女流作家の研究』法蔵館、一九六七年)、所京子「大斎院選子の仏教信仰」(『斎王和歌文学の史的研究』前掲)を参照。ただし、神も仏も同一視していたという点には従えない。なお長元四年の斎王託宣事件はよく知られているが(早川庄八『日本古代官僚制の研究』岩波書店、一九八六年)、神の世界に動揺の起こっていたことがわかる。散逸物語『隠れ蓑』の前斎宮の

歌「我がために天照る神のなかりせば憂くてぞ闇になほまどはまし」は興味深い（『風葉集』卷七）。「天照る神」の存在が強烈な実在ではなく、「世の中にたえて桜のなかりせば」のような反実仮想の構文に収まっているからである。

（4）物語文学は宮廷の「みやび」によって洗練されたわけだが、齋院の非仏教的なスタイルによっても洗練されたのであろう。すなわち、『枕草子』に「齋院は罪深かなれどをかし」と記され（一本の二四段）、『紫式部日記』に「所のさまはいと世はなれかんさびたり。また、まぎることもなし」と記されているスタイルである。『伊勢物語』齋宮関係章段や『源氏物語』葵・賢木巻を考えると、物語文学の齋宮・齋院起源説を提出できるかもしれない。『今昔物語集』卷二四第五七話には紫式部の兄弟が齋院に通う説話が見えるが、紫式部も齋院の内情に詳しくはなはずである。「齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。さりとして、わがかたの、見どころあり、ほかの人は目も見知らじ、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞ、またわりなき」と紫式部は齋院を強く意識しているからである（引用は『紫式部日記』古典集成）。

（5）『夜の寝覚』には中村本という改作本があり、『狭衣物語』には御伽草子になった『狭衣』がある。総じて改作本は鬱屈した表現を明快なストーリーに置き換えているように思われる。『無名草子』は今本『とりかへばや』について、古本と比べながら「これは、かたみにもとの人になり代りて出で来たるなど、かかること思ひ寄る末ならばかくこそすべかりけれ、とこそ見ゆれ」と評しているが、そこでは鬱屈したものが明快なものに置き換えられているのであろう。

（6）石山は『夜の寝覚』の女君が極秘裏に出産する場所であり、『更級日記』の作者が「双葉の人をも思ふさにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことを思はむと思ひはげみて」訪れる場所である（八七頁）。そこで紫式部が作品を生み出していたというのは興味深い一致である。なお三谷栄一「物語の行方」（『物語史の研究』有精堂、一九六七年）は中村本『夜寝覚物語』に石山寺縁起のごとき一節が挿入されていることを指摘する。改作本では石山について仏教的な意味づけがなされているわけである。

付記、本稿は本学特別研究費（二〇〇二～四年度）による研究成果です。